

地(知)の拠点整備事業 成果報告書

2013 平成25年度

⋖ 杏林大学

杏林大学 成果報告書 目 次

ごあいさつ	事業概要/事業実績
「地(知)の拠点整備事業」に採択されて ^{学長 跡見 裕4}	地 (知) の拠点整備事業 平成25年度実績報告書
さまざまな新規事業活動が本格的に スタートします ^{地域交流推進室 室長 古本 泰之} 5	杏林CCRC拠点推進委員会 議事録(第1回~5回)
杏林CCRC研究所の新設にあたって 杏林CCRC研究所 所長 蒲生 忍	補助事業 成果報告
超高齢社会を迎え分野を超えて 包括的に連携し協力 ^{=鷹市長} 清原 慶子 7	教育① 「地域と大学」講義2 全学-年次必修科目として地域志向講義を盛り込む
地域との協働により課題解決力を有する 学生の育成を ハ王子市長 石森 孝志	教育② PBL型教室の整備
3本の柱に沿った事業の推進を期待 羽村市長 並木 心 7	一成20年度以降本格建用開始へ 研究① 杏林CCRC研究所の新設
はじめに	研究②
「新しい都市型高齢社会における地域と 大学の統合知の拠点」による地 (知) の 処点整備事業について	杏林CCRC研究所セミナー報告 2 全体① 杏林CCRCラウンドテーブル 3
8	全体②
	杏林コモンズ 3
	社会貢献活動① <pre> 健康寿命延伸 </pre> 健康づくりプログラム 32
	社会貢献活動② 健康寿命延伸
	八王子市平岡町 わくわく健幸教室…34

2

沙火 人	プログラム
社会貢献	狀活動 ④
災害に	備えるまちづくり
	国羽村市駅伝大会における通訳
(英語	· タガログ語)案内係 ·········· 40
社会貢献	猷活動 ⑤
生きが	い創出
子育で	【支援プログラム 41
社会貢献	狀活動 ⑥
生きが	い創出
八王子	 一市老人クラブ連合会会合における
アロマ	'テラピーによる交流 45
社会貢献	狀活動 ⑦
生きが	い創出
若者フ	 フォーラムの実施に向けた
羽村市	5内見学会 46
地域・	大学間コーディネーターの活動
大学σ)志向と地域のニーズを
マッチ	ングさせ具体的な事業を展開
地域・大	学問コーディネーター 井上 晶子 4 7

フォーラム
第1回 杏林大学「地(知)の拠点整備事業」フォーラム 地域社会における大学の未来像 4
一地域の持続的発展にむけて一
第2回 杏林大学「地(知)の拠点整備事業」フォーラム
街じゅうみんなで5
―地域で子育てを支え、虐待を防止するために―
FD・SD活動

三鷹市との協働・連携を 一層深める 52 一三鷹市長 清原慶子氏による講演会 53 事業の理解と ビジョンの共有を図る 53 一職員研修会 55

出張報告
訪問
米国ワシントン州シアトル市、 アリゾナ州フェニックス市、 カリフォルニア州サンフランシスコ市 視察・意見交換 54
訪問
福井大学、富山県立大学、金沢工業大学 視察・意見交換 57
平成25年度 地 (知) の拠点整備事業 関係機関一覧
新聞等による 「地(知)の拠点整備事業」に関する紹介 61



あい

「地(知)の拠点整備事業」に 採択されて

学長 跡見 裕



杏林大学が進めている"地域との交流"は健康や教育などさまざまな分野に渡っております。 これらの遂行に関しては、教職員の多大な努力がありますが、それにもまして地域の皆さまの 教育・研究活動へのご協力が必要であります。まず地域関係者の皆さまに、心よりお礼申し上 げます。

私どもは、大学は地域との連携を深めてこそ、その存在意義が増すものと考えております。 大学には、なによりも教員・施設など多様な教育的資源があります。これを活用し、地域にお ける知の拠点として発展するのが本学の重要な任務でもあります。

このたび文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択され、平成25年度より5カ年間の活動を行うこととなりました。この事業は、自治体と連携して全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を国が支援するもので、全国319件の応募申請のうち、52件が採択されました。東京都内自治体のみとの連携に絞ると採択は2件でした。本学のこれまでの取り組みに一定の評価が寄せられたものと考えております。

今回の事業は、「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマのもと、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3分野を軸に、本学のこれまでの地域交流活動を、教育・研究・社会貢献の面において全学的に発展させていくものです。その活動の舞台として東京都三鷹市・八王子市・羽村市が対象となりますが、そのご協力も仰ぎつつこれまで以上に強力なパートナーシップを構築していかねばなりません。

平成25年度はそのスタートアップ期間として、これまでの取り組みに加え、連携三市との関係性の強化や、教育・研究・社会貢献のさらなる地域志向化に向けた仕組み作りを進めて参りました。本報告書は、それらの取り組みについてまとめたものとなっております。ご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただくと共に、引き続き本学の活動についてご指導ご助言をお願いできれば幸いです。

さまざまな新規事業活動が 本格的にスタートします

地域交流推進室 室長 古本 泰之



少子高齢化・グローバル化など急速かつ不断の状況変化に地域社会が直面している現在、その地域に関わりを持つ大学が果たす役割には、これまで以上に踏み込んだ内容が求められています。地域に対して大学がより真剣に向き合わなければならない時代を迎えていると言えます。

杏林大学では1970年の創立以来、主に医学部・保健学部・医学部付属病院による「健康」を軸とした教育・研究・社会貢献活動が東京都三鷹市・八王子市などを中心に積み重ねられてきました。総合政策学部・外国語学部の文系学部においても、主に八王子キャンパス周辺の東京都八王子市・羽村市を中心として、学部の特長を生かした多様な活動を行ってきました。また、本学は羽村市内にキャンパスを有しておりませんが、講演会活動の実施から徐々に活動の幅を広げ、平成22年には包括連携協定を締結させていただき、キャンパスを持たない地域での大学の包括的な研究・教育資源の活用という新たな地域交流のあり方を進めております。

それらの実績を通じて、平成25年度に文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に申請し、採択を受けました。これは本学のこれまでの地域交流活動の実績に加え、本学が「都市型高齢社会」をテーマとして設定したことへの一定の評価であると考えております。この事業は「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」を目指すという本学の立ち位置を明らかにするとともに、これまでの活動を統合発展させる重要な機会だと考えております。

本報告書の対象である平成25年度は、連携のパートナーである東京都三鷹市・八王子市・羽村市のご協力を経てさまざまな新規事業に向けて準備作業を進めてまいりましたが、平成26年度からはいよいよ本格的に活動がスタートします。本学の活動に引き続きのご指導ご支援をいただければ幸いです。

あ

杏林CCRC研究所の 新設にあたって

杏林CCRC研究所 所長 蒲牛 忍



杏林大学では、文部科学省による大学教育改革支援事業の一つである「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマで計画書を申請していましたが、8月2日に採択する旨の通知がありました。全国の各大学等から319件の申請があり、本学を含め52件の事業が採択されました。本学では、この事業を推進する中核的な施設として、10月1日付けでJR三鷹駅前産業プラザ内に「杏林CCRC研究所」を設置いたしました。

CCRCとは聴きなれない言葉ですが、米国では退職者コミュニティーに継続的にケアを提供していくことがCCRC (Continuing Care Retirement Community) の意味で用いられています。私達はそれを私達の現状に合わせてより広い意味に捉え、"杏林CCRC-Center for Comprehensive Regional Collaboration"、即ち "杏林大学の知を地域社会と統合的に協働させる拠点"をテーマとしています。

日本は世界に例を見ない少子高齢社会であり、都市集中型社会でもあります。その中で、私達の杏林大学は東京都三鷹市・八王子市にキャンパスを置き、羽村市とも親密な関係を構築してきました。この三市は、退職した団塊世代や世代間断絶など、それぞれに多様な課題に直面していきます。本事業は、三市と杏林大学の四つの学部が連携し地域課題に取組むものです。

その中核施設の杏林CCRC研究所では私の他に若手の特任教員2名と各学部からの1名の兼担教員で構成します。また学外の客員研究員として分野の垣根を越え、また従来の枠を超えた人選を行い、活発な意見交換と研究を行う体制を作りたいと考えています。我々の研究所は小さな組織ですが市民の皆様の協働の下に独創的な研究施設でありたいと考えています。そして、真に地域に根差した大学であり、本学のもう一つのテーマである世界に羽ばたく人材の養成をめざして行きたいと考えています。即ち、地域社会の維持には広い視野で持続的な発展を目指す姿勢が必要であり、世界的に活躍できる人材の養成には地域社会の皆様との協働が必須であると考えます。

皆様のご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

超高齢社会を迎え分野を超えて 包括的に連携し協力

三鷹市長 **清原 慶子**



平成25年度「地(知)の拠点整備事業」の採択を受けて、三鷹産業プラザ内に杏林CCRC研究所が開設される等、杏林大学が三鷹市を地(知)の拠点とする活動が始まっています。平成25年9月に締結した「杏林大学と三鷹市との包括的な連携に関する協定」に基づき、杏林大学と三鷹市は、超高齢社会を迎えて直面する諸課題を、分野を超えて包括的に連携し協力する体制づくりを開始しています。今後も、杏林大学という「知」の拠点が進める「地」域での取り組みが、三鷹市の市民、団体等との「恊働」を重ねつつ、さらに推進されることを期待しています。

地域との協働により課題解決力を 有する学生の育成を

八王子市長 **石森 孝志**



平成25年度に採択された「地(知)の拠点整備事業」を通じて、杏林大学が、関連市である本市、三鷹市、羽村市と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進められたことに、深く敬意を表するものであります。

現在、本市におきましても、貴学と連携し、高齢化 社会や災害対応などについて調査・研究を行っている ところであり、大学の知力を活かした研究成果に大い に期待を寄せております。

今後も、地域との協働により課題解決力を有する学生を育成されるとともに、貴学が「地域における地(知)の拠点」として、更に発展されることを祈念しております。

3本の柱に沿った事業の 推進を期待

羽村市長



杏林大学と羽村市を含めた三自治体の共同応募により採択を受けた地(知)の拠点整備事業が、平成25年度にスタートし、これまで実施してきた連携事業に加え、新たな取り組みに着手することができました。このことは、杏林大学の跡見学長を始め、関係者の皆様のご尽力の賜物と、心より感謝申し上げます。

これまで、杏林大学と羽村市で積み重ねてきたノウハウを生かし、地(知)の拠点整備事業に掲げる生きがい創出、健康寿命延伸、災害に備えるまちづくりの3本の柱に沿った事業が強力に推進されることを期待するとともに、羽村市といたしましても、杏林大学と連携し、本事業に取り組んでまいります。

杏林大学

「新しい都市型高齢社会における地域と 大学の統合知の拠点」による 地(知)の拠点整備事業について

連携自治体:東京都三鷹市/東京都八王子市/東京都羽村市

地(知)の拠点として

本事業が対象とする東京都三鷹市・八王子市・羽村 市は地域内に退職した団塊世代を多く抱え、多様な課 題に直面している。

本事業は、この三自治体と連携し、良医を育成する医学部、健康づくりをはじめとして助産から高齢者の

リハビリテーション・生活支援までを扱う保健学部、社会問題に俯瞰的・学際的視点で取り組む総合政策学部、創造的なコミュニケーションとホスピタリティのプロを育成する外国語学部の教育・研究資源を動員し、包括的地域連携を推進する杏林CCRC: Center for Comprehensive Regional Collaborationを構築し、問題解決力を有する学生を育成するとともに新しい都市型高齢社会の姿を模索していく。

さらに医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学

部の地域に関連する既存科目の整理・統合に加え、地域志向の教育を推進するために科目の新設を行い、

「生きがい創出|「健康寿命延伸|「災害に備えるまち

づくり」をテーマに据えた「ウェルネス科目群」を設

置する。ウェルネス科目群は地域関係者も受講可能と

し、地域をフィールドにPBL (Problem Based Learn-

ing) 型の演習や地域内でのボランティア・インター

ンシップを行い、学生と地域関係者が学び合いながら、

地域の課題解決を目指す。

教 育 地域志向化

地域との協働による課題解決を通して地域志向かつ 問題解決力を持つ学生を育成し、なおかつ新しい都市 型高齢社会の姿を模索する。すなわち、『都市型高齢 社会の健康と安心』を主題に、学生と地域関係者が共 に学び、本学の教育・研究機能が集中する予定の三鷹 市を中心に取り組みを進め、次に八王子市・羽村市に もその成果を反映していく。

して「杏林CCRC研究所」をJR三鷹駅前に設置し、専任の杏林CCRC特任教員2名と各学部からの1名の兼担教員で構成する。平成25年度から杏林CCRCについて集中的に研究を行うとともに、教育・研究・社会貢献の体制を強化する。

研 究 杏林CCRC構想

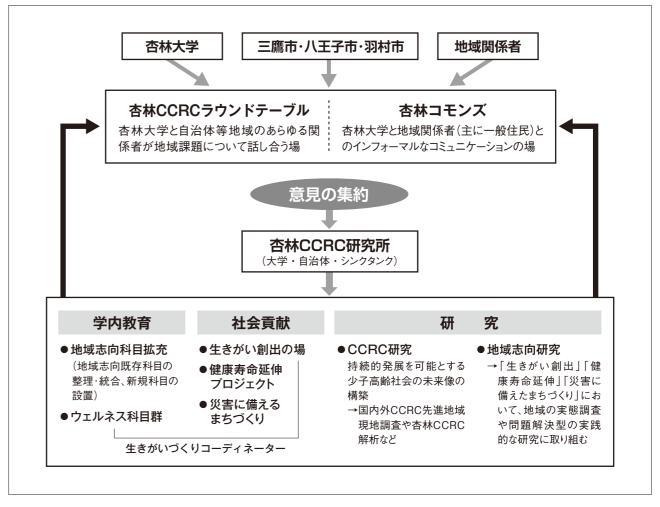
本事業では、三鷹市・八王子市・羽村市と連携し、 本学4学部の教育・研究資源を動員し、包括的な地域 連携を推進する杏林CCRCを構築する。この拠点と

社会貢献地域連携の場

杏林CCRC研究所を軸として、会議体としての「杏林CCRCラウンドテーブル」および地域と本学との知的交流の場となる「杏林コモンズ」を連携自治体の中心市街地に設ける「杏林CCRCラウンドテーブル」は本学と自治体、商工会議所等各団体、NPO法人等地

域の関係者が一堂に会して地域課題について話し合う場である。杏林コモンズでは、杏林CCRC研究所等で提示された課題をテーマとして、e-learning等のICT (Information and Communication Technology)を活用し、地域と大学との知の共有の場、学生と地域関係者との学びあいの場(生涯学習の場・生きがいづくりコーディネーター養成)として活用する。

■事業概要図



■連携する地域とその課題



地(知)の拠点整備事業 平成25年度実績報告書

補助事業の実績

I 教 育

教育の地域志向化開始

P24~25参照

「地域と大学」講義

全学一年次必修科目「地域と大学」のあるべき姿を探るため、杏林CCRC構想の中核として設置した杏林CCRC研究所では、本学全学部のシラバスを精査すると共に、各地の大学、特に本学と類似の構成と規模を持つ大学での「地域志向教育」の実施状況を株式会社三菱総合研究所に委託し調査した。また、各学部の教務委員会と連携し「地域と大学」講義を平成26年度から試行する準備を進めた。総合政策学部においては「学際演習」の一部、外国語学部においては「基礎演習」の一部を連携三市の地域課題をテーマとして行った。

PBL (Probrem Based Learning) 型教室

八王子キャンパスにPBL型教室1室、三鷹キャンパスに3室整備するため平成25年11月に本学所定の調達手続きを開始した。三鷹キャンパスにおいては教室の余裕が少なく、平成25年度後期講義終了後に整備を開始し、平成26年3月25日に設置完了した。平成26年度から、講義への供用を開始する。

設備の教育への供用

肺運動負荷モニタリングシステムは設置完了後(平成25年12月・Ⅲ④参照)、理学療法学科の実習「プロフェッショナル・スキル」(平成26年1月6・22日)、また学期末にも係らず理学療法学科の卒業研究にも多数(合計25回)利用された。救命訓練用人形レサシアンスキルモニターは設置完了後(平成26年1月・Ⅲ④参照)、救急救命学科の実習「シミュレーション」(平成26年1月16・17日)に供用した。

Ⅱ研究等

三菱総合研究所との連携協議開始・研究会 開催(以降月例で開催)による地域志向研究 と CCRC 研究のマスタープラン作成開始

P26 ~ 参照

研究所の設置と体制の構築

本学の新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点形成を目指すCOC事業、すなわち杏林CCRC構想の中核として、三鷹市駅前に「杏林CCRC研究所」を平成25年10月1日に開設した。研究所では、特に本学の研究・教育資源を動員し、また幅広い連携を行うことで持続的に発展可能な地域の未来像を模索し構築することを目指す。

これを実現するため、保健学部教授の蒲生が所長を 兼任し、実績があり将来が嘱望される若手研究者松井 孝太(東京大学大学院法学政治学研究科博士課程2年 (修士(法学)・平成25年10月1日付採用)と相見祐輝(杏 林大学医学部第二内科実験助手・臨床検査技師・修士 (保健学)・平成25年12月1日付採用)を特任助教として採用した。さらに、東京大学大学院教授樋口範雄氏と三菱総合研究所主任研究員松田智生氏に客員研究員を委嘱した。また研究所事務担当の派遣職員一名を配置した。

杏林CCRC研究所セミナーの開催

平成25年12月18日より研究所における月例の研究会として「研究所セミナー」を開始、第一回目は学外の講師として独立行政法人医薬基盤研究所難病・疾患資源研究部部長の増井徹氏をむかえ、以降平成26年2月28日まで3回開催した。

地域志向教育研究の試行

平成26年1月の第4回拠点推進委員会で平成26年度 以降の本格的運用に向け地域志向教育研究の募集要項 を策定し、研究一件(50万円)を試行することとした。 平成26年3月3日の第5回拠点推進委員会で研究所 より提案した研究課題「生活習慣病の遺伝的背景に関 する研究:高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点」 による試行を決定し、来年度以降広く学内公募を実施 可能とする体制を整えた。

その他の活動

研究所蒲生他は学外で開催された「高齢社会」及び 「地域課題」関連の講演会や研修会に積極的に参加し、 各所での活動や研究の動向を把握することに努めた。 松井は東京大学樋口教授の「高齢者法」講義に補助者 として関与した。

> 米国・石川県等の国内外先進地域での 現地調査開始

> > P54 ~ 参照

海外調査

(3)

平成26年2月1日より10日まで米国ワシントン州シアトル市、アリゾナ州フェニックス市、カリフォルニア州サンフランシスコ市の高齢者施設の視察を研究所蒲生と松井が実施した。シアトル市とフェニックス市では蒲生と長く共同研究を行っているワシントン大学医学部生命倫理学教室Dr. Thomas R. McCormickの案内でそれぞれ数カ所のCCRCを、サンフランシ

スコ市では同じく蒲生と旧知のCalifornia Pacific Medical CenterのJulie HANADA氏の案内で特に日系人の高齢者施設を見学した。

国内調査

平成26年1月28日より30日まで地域交流推進室長古本他5名が、福井大学、富山県立大学、金沢工業大学のCOC事業採択校に出張し、各大学におけるCOC事業の運用体制、地域志向教育、地域志向研究の状況について意見交換を行った。

Ⅲ 社会貢献

「生きがい創出」「健康寿命延伸」(4) 「災害に備えるまちづくり」各プロジェクトの開始

P32 ~ 参照

設備の設置

本補助事業の助成による設備「肺運動負荷モニタリングシステム、エルゴメーター、救命訓練用人形レサシアンスキルモニター」は、交付決定後平成25年10月より調達に向け本学所定の手続きを開始し、平成25年12月から平成26年1月にかけ設置を完了し、供用を開始した。また、「トレッドミル、心臓負荷モニタリングシステム、携帯用睡眠時無呼吸検査装置」については平成26年1月22日の追加交付決定通知受領後、直ちに調達に向け本学所定の手続きを開始し、平成26年3月下旬に設置を完了した。

肺運動負荷モニタリングシステムとエルゴメーター、レサシアンスキルモニターは、本学近隣の八王子市立加住小中学校での中学生と教員を対象とした救急救命講習(AED講習を含む。平成26年3月7日)及び近隣の高校生対象のスプリングセミナーでの講習(平成26年3月26日)等に供用した。また、羽村市のサイクリング同好会からの要請に基づき、追加交付の設備を含め適正な運動負荷量の設定を援助するため、機器の設定やテスト稼働などを行った。

社会貢献活動

地域交流委員会及び杏林CCRC拠点推進委員会の

10

議を経て、保健学部教授太田ひろみ・准教授佐藤喜美子他による「多摩多胎ネットワーク支援事業(平成26年1月11日他2回・三鷹市)」、保健学部講師吉野純による「極低出生体重児を育てる家族の育児支援事業(平成25年10月26日他一回、三鷹市)」、保健学部准教授榎本雪絵他による「平岡町わくわく健幸教室(平成25年11月9日他5回、八王子)」、その他全7事業に助成費を支給した。その他10事業に本学独自の地域交流支援事業費を支給し、全部で17事業の社会貢献活動を遂行した。

地域・大学間コーディネーター

平成25年10月1日付で、本学外国語学部非常勤講師で地域行政に詳しい井上晶子氏に地域・大学間コーディネーターを委嘱した。

Ⅳ 全 体

(5)

杏林CCRC拠点推進委員会設置(平成25年9月第一回杏林CCRC拠点推進委員会開催以降月例で開催)、3市と具体的連携協議

P19~参照

12

杏林CCRC拠点推進委員会の設置

本事業採択後、速やかに学長を委員長とし、副学長、各学部長、杏林CCRC研究所長、地域交流推進室長他を委員とする拠点推進委員会の規程を制定し、平成25年9月17日に第一回の委員会を開催した。以降、平成25年度中に5回の会議を行い、人事、活動計画、内規等についての審議を行い、本事業の意思決定機関とし、進捗状態の管理を行った。また、本事業の総括責任者である学長(跡見)のもと、杏林CCRC研究所長(蒲生)、地域交流推進室長(古本)、八王子事務部副部長(黒田)による四者連絡会を開催し、拠点推進委員会へ上程する議題整理を行った。

地域交流推進室・地域交流委員会

本学における従来の社会貢献活動は地域交流推進室 長(古本)が委員長を務め八王子キャンパスの保健学 部、総合政策学部、外国語学部の委員からなる地域交 流委員会で所管していた。本事業の採択を受け、この 委員会では本学CCRC構想に含まれる社会貢献活動 に関わる事項も併せて所管すること、平成26年度から は医学部からの委員を含めた全学的な委員会とするこ とを決定し、地域活動助成費の募集要項を策定した。

本事業の採択を受け、その事務を所管する地域交流 課の兼任職員4名(課長を含め地域交流課と学生支援 課の兼任)に派遣職員2名(専任)を増員(平成25年 10月1日及び17日採用)した。なお、平成26年度から は課長(専任)、兼任職員2名(学生支援課兼務)と

派遣職員2名(専任)とすることになった。

地域交流課

現行 ウェブサイト (「社会との連携」) ⑥ 部分の再構築・本事業についての特設 サイトの設置完了、学内外での周知徹底

本事業採択後、速やかに本学ホームページ上に告知 (平成25年8月3日) し、平成25年10月に「地(知)の拠点整備事業:杏林CCRC構想」の特設サイトを 設けた。特設サイトには「学長メッセージ」「杏林 CCRCについて」「杏林CCRC研究所」他の紹介に加え、「最新ニュース」では地域貢献活動やシンポジウム等への参加報告、出張報告等を掲載している。また「イベント・セミナー・シンポジウム」では「フォーラム」の予告と報告、「研究所セミナー」等に関する予告と 報告他を掲載した。

本事業についての一般向け事業紹介 パンフレットの発行

11月2日、杏林CCRC構想を紹介する和文、英文のパンフレットが完成し、関係機関約300カ所などに配布した。また、本学訪問者やフォーラム等の参加者約300名に配布した。

杏林 CCRC 研究所活動スタート

P26~参照

杏林CCRC構想の中核として、三鷹市駅前に「杏林CCRC研究所」を平成25年10月1日に開設した。「CCRC研究」を遂行し、「持続的発展を可能とする少子高齢社会の未来像」を構築するため、保健学部教授・蒲生を所長に、各自の分野で実績があり将来が嘱望される若手研究者を特任助教として二名、当該分野で著名な研究者を客員研究員として二名の体制とした。(②参照)

杏林 CCRC ラウンドテーブル開催

P30 参照

平成25年11月2日のフォーラム開催時に、連携三市の三鷹市長清原慶子氏、羽村市長並木心氏、八王子市副市長村松満氏、本学学長跡見裕他が参加しラウンドテーブルを開催した。

第1回 (11月2日)・第2回 (11月30日) 杏林 CCRC フォーラム (三鷹市) の 開催 P48~参照

第1回地(知)の拠点事業・杏林CCRCフォーラム「地域社会における大学の未来像 —地域の持続的発展に向けて—」を平成25年11月2日三鷹駅前の三鷹ネットワーク大学で開催した。平成25年11月30日には第2回として「街じゅうみんなで —地域で子育てを支え、虐待を防止するために—」を開催した。

11 杏林コモンズ設置

P31 参照

13

平成25年11月30日の第二回フォーラム開催に先立ち 第一回のコモンズを開催した。研究所セミナーにも、 行政及び市民団体等からの参加者があり、三鷹市にお けるコモンズ活動の一部として位置づけることができ た。

本事業の採択を受け、平成25年9月6日、三鷹市と包括的な連携に関する協定を締結した。また、これを受けて、平成26年1月22日、三鷹市長清原慶子氏を講師として本学大学院講堂(八王子キャンパスにも中継)においてFD・SD講演会を開催し、本学教職員約330名が参加した。

補助事業における 具体的な成果

I 教 育

① 「地域と大学」講義

P24 参照

研究所は本学においての「地域と大学」の講義のあり方を探るためシラバスを精査すると共に、他大学での地域志向科目についての調査を行った。それに基づき、平成26年度は「地域と大学」の講義を設置するために全学的な学則改正は見送り、各学部の既存の講義のなかに地域志向講義を盛り込みシラバス上に明記することとした。今後、「地域と大学」講義のあり方についてさらに検討を加え、各学部の教育の特性を生かしたうえで、全学で方向性を共有し、かつ学際的な内容となるような構成を確立する予定である。

医学部においては平成26年度より一年次必修科目「医療科学A」において、保健学部においても必修科目「保健学概論」(臨床検査・健康福祉・理学療法・作業療法)、選択必修科目(必修を指導)「ホスピタリティ論」(看護・養護)、必修科目「発達心理学」(看護)、「医学概論」(臨床工学・救急救命・健康福祉)において「地域と大学」の教育内容を取り入れる準備が完了した。

総合政策学部においては、平成25年度に実施した「学

際演習 | において | クラス分の内容を地域志向化した。 また、学則改正を行い、平成26年度入学生1年次必修 科目に「地域と大学」、1年次以上選択科目として「プ ロジェクト演習 | を設置した。また、「学際演習 | の 内容を一部地域志向化することで、地域を対象とした PBL型科目も準備した。

外国語学部においては、平成25年度秋学期「基礎演 習-2|(1年次必修科目)の内容を一部変更し、地 域志向化を行った。また学則改正を実施し、平成26 年度入学生1年次必修科目に「地域と大学」、2年次 科目として地域を対象としたPBL型科目として「プ ロジェクト演習 | (英語学科・中国語学科は選択科目、 観光交流文化学科は必修科目)を設置した。

PBL型教室

PBL型教室の設置完了が、講義や実習の終了時期に なったため、三鷹キャンパス・八王子キャンパスいず れの教室においても供用期間は短いものとなった。な お、八王子キャンパスのPBL型教室においては本学 COC事業「杏林CCRC構想」の教育・社会貢献活動 に関連する打ち合わせおよびゼミナール活動に計4回 試用し、平成26年度からの本格供用の体制を整えた。

設備の設置は、ほぼ講義や実習が終了する時期に なったため、教育への供用期間は短いものとなった。 しかしながら、肺運動負荷モニタリングシステムは設 置完了直後から理学療法学科の実習「プロフェッショ ナル・スキル」(平成26年1月6・22日) に利用された。 救命訓練用人形レサシアンスキルモニターは本学の備 品として10体を利用していたが、絶対的な不足状況に あったため、本事業により追加で7体を購入し設置完 了後、直ちに救急救命学科の実習「シミュレーション」 (平成26年1月16・17日) に供用し、効率的かつ効果 的な教育を行うことができた。

Ⅱ研究等

② 研究所の設置と研究体制の構築

P26 ~参照

三鷹市駅前に平成25年10月1日に開設した「杏林 CCRC研究所」は、本学の新しい都市型高齢社会にお ける地域と大学の統合知の拠点形成を目指すCOC事 業、杏林CCRC構想の中核として、杏林CCRC研究 を推進する拠点であり、三鷹市でのコモンズ活動の拠 点ともなる。研究所長を兼任することになった本学保 健学部教授蒲生は分子生物学、特に最近は循環器疾患 の遺伝子解析において顕著な業績を挙げているのみな らず、米国の尊厳死法等の生命倫理についても業績を 上げている。蒲生は米国の生命倫理分野の研究者とも 長年にわたり共同研究を続け、また親交を重ねており、 今年度の米国での先進的な高齢者施設の調査活動にあ たり、現地施設の仲介や情報提供において、その交流 が大いに効果を挙げた。

特任助教の松井はYale大学で2年間の客員研究員 としての研究経験を持ち、米国CCRC研究を推進にお いて中心的役割を果たすことが期待できる。また、客 員研究員に迎えた英米法を専門とする東京大学大学院 法学政治学研究科教授樋口範雄氏とも親交があり、樋 口教授の高齢者法に関する講義に関与することで、今 後の研究と教育活動の展開に貴重な基盤を形成した。

特任助教の相見祐輝は難治性の循環器疾患の遺伝子 解析で多くの研究実績を挙げてきた。今後の高齢社会 における医療情報の取扱いに関する課題の検討に向け て準備を進めている。

研究所では、特に本学の研究・教育資源を動員し、 また他大学や学外の諸機関等とも幅広く積極的に連携 することで「持続的に発展可能な地域の未来像」を構 築することを目指す。

杏林CCRC研究所セミナーの開催

研究所の体制が確立された事をうけ、月例の研究会 「研究所セミナー」を開始した。セミナーは原則、研 究所内で開催し、学外の講師による講演や関係者との 聴講自由な意見交換の場とし、杏林コモンズ活動の一

部として位置付けた。第一回目は「ヒトゲノム・遺伝 子解析研究に関する倫理指針 | の改訂に参加した独立 行政法人医薬基盤研究所難病・疾患資源研究部部長増 井徹氏とエスアールエルの堤正好氏をむかえ、遺伝子 解析における同意形成をテーマに開催した(参加者7 名)。以降平成26年2月28日まで合計3回開催した。 第三回では本学の幅広い関係者に加え、三鷹市職員や 三鷹市のNPO関係者等を加え13名が参加し、活発で 率直な意見交換が行われた。今後展開を予定している インフォーマルな市民との対話の場としてのコモンズ 活動として、また地域と密着したより高度な教育活動 や研究活動が期待できる場として期待できた。

地域志向教育研究の試行

本年度は平成26年度以降の本格的運用に向け文部 科学省科学研究費補助金取扱要項を基盤として地域志 向教育研究の募集要項及び研究費の取扱要項を策定し た。研究一件(「生活習慣病の遺伝的背景に関する研 究: 高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点」50万 円)を平成26年3月に採択し、研究費の支出取扱に関 して円滑に運用する体制を試行した。これにより平成 26年度以降広く学内公募により地域志向教育研究を全 学的に実施する体制を整えることができた。なお、試 行した地域志向教育研究の成果については平成26年度 末までに成果報告書を提出することとした。

その他の活動

研究所蒲生他は学外で開催される「高齢社会」及び 「地域課題」関連の講演会や研修会に積極的に参加し た。客員研究員の東京大学樋口氏も東京大学リーディ ング大学院「活力ある超高齢社会を共創するグローバ ルリーダー養成プログラム | の一員として、三菱総合 研究所松田智生氏はプラチナ社会研究センターの一員 として、今後の日本の高齢社会のありかたや米国の高 齢者施設CCRCの紹介等、活発な言論活動を展開して いる。樋口氏及び松田氏の紹介により多数の講演会や 研究会に参加する機会を得ることができ、都市型高齢 社会に関する考察の参考となった。

本事業が採択された時点では、平成25年度の本学及 び杏林医学会等の関連団体が主催する市民向けの講演 会活動の詳細が既に決定されており、会場等の都合か ら追加は困難であった。しかし、杏林医学会が主催し た公開シンポジウム (平成25年11月16日) 等の開催運 営に積極的に研究所員と事務員が関与することで平成 26年度以降の活動運営の参考とすることができた。

③ 事例調査

P54 ~ 参照

海外調査

米国ワシントン州シアトル市、アリゾナ州フェニッ クス市の視察においては研究所蒲生と長年共同研究 を行ってきたワシントン大学医学部生命倫理学教室 Dr. Thomas R.McCormickに施設との仲介と紹介の 労をとっていただいたおかげで短い滞在ながら多様な 運用形態の高齢者施設CCRCを訪問することができ た。米国のCCRCは高齢者に理想的な環境を提供して いるが、それを日本で運用するためには幾つかの法的 規制や意識的な障壁を超える必要があることが示唆さ れた。また、この成果を研究所セミナーで速報として 報告した際に、本学副学長・教授で英国出身のPaul Snowdenより、文化的基盤や人種多様性は共通する ものは多いが米国とは保健・保険制度が異なる英国で の調査を薦められ、適切な訪問施設紹介の可能性も示 唆された。サンフランシスコ市では同じく蒲生と旧知 のJulie HANADA氏の案内で特に日系人の高齢者施 設をつぶさに見学する貴重な機会を得た。米国の日系 人社会は第二次世界大戦後の日系移民の途絶により極 端な超高齢社会を形成しており、まさに日本の近未来 像である。今後、さらに現状を詳細に分析し我々への 示唆を探る必要がある。

国内調査

北陸地域のCOC事業採択校3校(福井大学・富山 県立大学・金沢工業大学)を訪問し、これまでの地域 志向教育・研究・社会貢献活動の内容、教育効果の測 定方法、地域との連携方法、学内での運用体制の在り 方、COC事業採択に伴う新たな動きを中心にヒアリ ング調査および意見交換を行った。地域との全学的な 連携を進めるうえでの学内組織のあり方や全教職員の 地域志向化に向けた意識変革など、本学の事業取り組 みについて参考となった。また、地域志向の教育を行 う上で、地域で学ぶことが学生の成長にどのようにつ ながっているのかを測る指標の必要性についても意見

平成25年度の研究所のセミナーは3回に留まった

P26 ~ 27 参照

各地域関係者から提示された課題に対し「地域志向

が、当初予想された学内や連携市からの参加者に加え て、三鷹市のNPO、またセミナーのテーマに興味を 持つ他市からの参加者を迎える事ができた。参加者も 回を重ねる毎に増加し、研究活動としてのみならず、 インフォーマルな意見交換の場としてのコモンズ活動 としての広がりが期待できた。

8 杏林 CCRC 研究所

教育研究」として、杏林CCRC研究所が中核として解 決に向け、教育・研究のプロジェクトを設定するため の準備を進めた(Ⅱ③)。

Ⅲ 社会貢献

容を取り入れていく必要がある。

(4) 設備の設置

本事業の助成により、平成25年度中に肺運動負荷モ ニタリングシステム等に加え、心臓負荷モニタリング システム等を設置できた。これにより心肺の両機能を 統合的に測定できる環境、即ち運動リスク等個人の体 力や身体機能を専門機器により客観的に計測・評価す る体制を整備できた。年度末となったが、羽村市のサイ クリング同好会からの要請に基づき、適正な運動負荷 量の設定をこのシステムを用いて援助するため、機器 の設定やテスト稼働を行い体制を整えた。来年度以降、 連携する三鷹市、八王子市、羽村市と共に各種のス ポーツ団体に対し、適正な運動量の設定に基づく生涯 スポーツの啓発活動として幅広い運用が期待できる。

交換を行った。今後も引き続きCOC事業採択校への

訪問調査を行うとともに、本学の取り組みに資する内

救命訓練用人形レサシアンスキルモニターは救急救命 講習プログラムにおける実技指導を行うためのものであ り、これを用いた近隣の中高校生対象の救急救命講習で は、継続的な実施や多様な状況に対応できる講習への要 望が寄せられ、平成26年度の参考とすることとした。

社会貢献活動の実績

社会貢献活動を活性化するため地域活動助成費の募 集要項を策定し、地域交流委員会及びCCRC拠点推進 委員会の議を経て、三鷹市での「多摩多胎ネットワー ク支援事業 |、「極低出生体重児を育てる家族の育児支 援事業」、八王子市での「平岡町わくわく健幸教室(平 成25年11月9日他5回、八王子)」他、合計17事業の「子 育て支援|、「健康寿命延伸|、「生きがい創出|、「災害 に備えるまちづくり に関わる活動を展開した。

これらの活動には多くの本学学生がアルバイトやボ ランティアとして関与した。この体験は地域住民にとり、 単に育児や健康に関する知識提供や相談の場ではな

く、近隣で学び生活する学生との接点を提供する貴重 な機会となった。また学生にとっても、住民の抱える 問題に肌で接して共有し、実践的に学ぶ機会となった。 地域・大学間コーディネーター

平成25年度、コーディネーター井上は主に羽村市と の連携に関与し地域ニーズや課題を明らかにし、大学 教員とのマッチングに努めた。特に、平成26年6月の 羽村市の全市的イベントである 「羽村健康の日」には、 保健学部准教授石井博之他による心肺運動負荷モニタ リングシステム(平成25年度末に設置完了)を用いた 健康寿命延伸のため生涯スポーツ推進プロジェクトの 開催が決定している。

₩ 全

(5) 杏林 CCRC 拠点推進委員会の設置 P19~参照

杏林CCRC拠点推進委員会は、第一回の委員会を平 成25年9月17日に開催以降、平成25年度中に5回の会 議を行い、人事、活動計画、各種内規の制定等につい ての審議を行い、本事業の進捗状態の管理を行った。 本委員会は本学CCRC構想を円滑に推進するのみな らず、本学CCRC構想に加え、従来の社会貢献活動を 総括連携するシステムとして機能した。本学は平成28 年度に八王子キャンパスを現在の三鷹キャンパスから 徒歩圏に移転する予定である。本委員会における本学 CCRC構想での学際的科目の設定や学部間の協働運 用等は、移転後の本学の教育や研究のモデルとなるこ とが期待され、学部の壁を越えた活発な議論が展開さ

地域交流推進室・地域交流委員会

地域交流委員会では地域交流推進室長を介して、本 学での多様な社会貢献活動のうち、本学CCRC構想の 目的に合致する活動に対しCOC事業として積極的な 助成を行うように拠点推進委員会へ上申し、連携体制 を確立することができた。さらに平成26年度より地域 交流委員会を、医学部からの委員を新たに含めることで

⑥ ウェブサイトにおける情報公開

本学の全学的組織とすることが決定され、より有機的な

連携の基に社会貢献活動を展開する基盤が整備された。

本事業の採択を受け、地域交流課に派遣職員を配置

することで事務の円滑化を図ることができた。また本

学CCRC構想推進の重要性に鑑み、平成26年度から地

域交流課長を従来の兼任から専任とすることも決定さ

れ、今後のさらに迅速かつ広範な事業運営が期待され

本学ウェブサイト上に「地(知)の拠点整備事業」 の特設サイトを平成25年10月に設け、本学CCRC構 想の取り組みを紹介するのみならず、「最新ニュース」 欄では地域貢献活動やシンポジウム等への参加報告等 を掲載し、事業の進捗状態を報告した。また「イベン ト | 欄では「フォーラム | や「研究所セミナー」、「講 演会 | 等に関する予告と報告他を掲載したことにより、 市民や本学の取組に興味を持つ方々からの問合せを受 けた。特設サイトへのアクセス数は開設以来平成26年 4月末までは約6.100件、一日平均アクセス数は30件 弱であった。

地域交流課

(7) 事業紹介パンフレット

平成25年11月2日、本学の事業を紹介するパンフ レットが完成し、連携市、周辺の大学等教育機関へ配 布した。パンフレット作成にあたっては、外国人居住 者も考慮に入れ、同内容の英文版も合わせて作成し、 本学が外国語学部を有するという特性を強調すること ができた。

⑨ 杏林 CCRC ラウンドテーブル

P30 参照

平成25年11月2日の第1回フォーラムを挟んで 本学と自治体等の関係者が地域課題を話し合う杏林 CCRCラウンドテーブルを開催した。フォーラム開始 前の会合では多忙の中、連携の三鷹市長清原慶子氏、 羽村市長並木心氏、八王子市副市長村松満氏が揃い、 本学学長跡見裕他と約一時間の懇談が行われ、今後の 連携の方向性について、特にそれぞれの市の特性に応 じた連携を進めること等が話し合われた。フォーラム 終了後には首長と学長の連携の方向性の懇談を受け、 三市と本学の実務担当者とが一堂に会してフォーラム や講演会の開催、それに連動するコモンズ活動等につ いて今後の連携の具体的手順等について意見交換し、 意向を確認する場となった。

10 杏林 CCRC フォーラム

P48 ~ 参照

第1回杏林大学・地(知)の拠点事業CCRCフォー ラム「地域社会における大学の未来像 ―地域の持続 的発展に向けて― には三鷹市、八王子市、羽村市の

市長等関係者や市民、それに本学の教職員や学生等あわせて約150人が参加した。本学学長跡見の開会挨拶に続き、三鷹市長清原慶子氏、八王子市副市長の村松満氏、羽村市長の並木心氏からこれまでの本学との連携事業と今後の事業展開に期待する挨拶、地域交流推進室長古本が「杏林大学の地域交流活動の現状と今後の展開」のテーマで報告、さらに杏林CCRC研究所長蒲生が「高齢化社会における大学の統合知の役割:杏林CCRC研究所の目指すもの」と題して講演した。

平成25年11月30日には第2回として「街じゅうみんなで 一地域で子育てを支え、虐待を防止するために一」を、保健学部准教授熊井利廣をコーディネーターに三鷹ネットワーク大学で開催した。本学外国語学部教授金田一秀穂の「子どものことば」の講演に続き、三鷹市子ども政策部子ども子育て支援課長濱仲純子氏、三鷹市子ども家庭支援センター長清水節子氏、三鷹市民生児童委員協議会会長向井百重氏、NPO法人子育てコンビニ代表理事小林七子氏、本学医学部付属病院医療福祉相談室課次長加藤雅江がパネリストとして「子どもの虐待防止」について現状報告と意見交換を行った。行政・大学関係者を中心に、同問題に興味を持つ近隣住民も含め100人以上が参加した。

11 杏林コモンズ

P31 参照

18

平成25年11月30日の第二回フォーラム開催に先立ち第一回のコモンズを開催した。フォーラムのパネリスト及び本学からCCRC研究所長、地域交流推進室長、コーディネーターを勤めた熊井が出席し、三鷹市における児童虐待防止の市民活動について活発な意見交換が行われ、今後も継続して協力を進めることを約束した。

研究所セミナーにも、行政及び市民団体等からの参加者があり三鷹市におけるコモンズ活動の一部として位置づけることができた(II(2)、IV(8)参照)。

本事業の採択を受け、平成25年9月6日、三鷹市と 包括的な連携に関する協定を締結した。この協定によ り、本事業のみならず杏林大学全体と三鷹市は相互の 資源及び研究成果等の交流を促進し、活力ある地域社 会の創造や人材育成に一層の進展が期待できる。また、平成26年1月22日に開催した三鷹市長清原慶子氏を講師とするFD・SD講演会は、三鷹キャンパス大学院講堂のみならず同キャンパス臨床講堂、八王子キャンパスK棟8階大会議室にもTV中継され、各々の会場はほぼ満員となり、合計約330人の教職員がつめかけた。清原市長は「杏林大学と三鷹市は長年にわたる『協働のパートナー』であり、21世紀の新たな大学の形としての可能性を、皆様と一緒に切り拓いていきたい」と呼びかけた。本学からは副理事長松田剛明が「三鷹市との協働・連携を今後より一層深めていきたい」と答えた。本講演会は本学CCRC事業の意図と方向性を全学の教職員に周知する絶好の機会となった。

平成25年度

第1回 杏林CCRC拠点推進委員会議事録

日 時:平成25年9月17日 10:00~10:50

場 所:八王子キャンパス D棟1階 第一会議室

出席者:跡見、スノードン、後藤、大瀧、松田、赤井、蒲生、古本、加藤、黒田(雅)、樋田、安藤、依田、田上、

青柳(敬称略)

欠席者:なし

報告・審議事項

1. 地(知)の拠点整備事業について

本事業を推進していくために杏林CCRC拠点推進 委員会を置き、地域交流推進室・地域交流課、杏林 CCRC研究所、4学部3研究科が連携して事業を推 進する。学外には杏林CCRCラウンドテーブル、杏 林コモンズを置き、課題や問題を地域交流推進室で 吸い上げ、杏林CCRC研究所で情報収集や研究を行 い、地域交流推進室、4学部で地域に還元していく。 推進委員会はその状況を統括し、第三者評価機関を 設置して評価を受ける。杏林CCRC研究所について は、保健学部蒲生教授に所長を委嘱する。

2. 今後の事業展開について

三鷹市、八王子市、羽村市との連携を中心に、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」をテーマに進めていく。役割分担は、研究分野を杏林CCRC研究所が担い、社会貢献は地域交流推進室が担う。教育については、「地域と大学」の新設、地域をテーマとする講義、PBL形式のプロジェクト

演習科目の設置、グローバル人材育成プログラムとの連携を掲げ、全学で地域志向に取り組む。各自治体からの意見等を大学のリソースと合わせて取り組むことが地域志向研究に繋がる。杏林CCRC研究所は三鷹駅近くの産業プラザ内に設置され、構成員は所長、特任教員、客員研究員、事務員となる。

3. 人事関係について

杏林CCRC研究所に松井孝太氏が特任助教として、 樋口範雄氏が客員研究員として、地域交流推進室に 井上晶子氏がコーディネーターとして採用が承認さ れた。

4. その他

19

委員長より杏林CCRC研究所の新設に伴う備品発 注について説明、承認された。

加藤委員、樋田委員から、杏林CCRC拠点推進委員会委員へ吹野広報・企画調査室長、黒田八王子事務部副部長2名の推薦があり、承認された。

平成25年度

第2回杏林CCRC拠点推進委員会議事録

日 時:平成25年10月21日 16:50~17:30

場 所:三鷹キャンパス 医学資料情報センター6階 大会議室

出席者:跡見、スノードン、大瀧、松田、赤井、蒲生、古本、井上、松井、加藤、五十嵐、樋田、黒田、安藤、

依田、青柳、黒羽、井上(敬称略)

欠席者:後藤(敬称略)

報告・審議事項

1. 人事関係について

杏林CCRC研究所所属で特任助教の相見祐輝氏の 採用が承認された。

2. 研究活動について

- 杏林CCRC研究所の新設について
- 文部科学省科学研究費補助金申請について
- ・地域研究の具体案検討について

3. 地域貢献事業について

- 各学部での地域貢献活動の継続と拡大の依頼について
- ・新規貢献活動の具体策検討について

4. 各学部での教育活動依頼について

- 「地域と大学」の設定を含めた新規教育活動の具体策検討について
- ウェルネス科目群設定と「生きがいづくりコーディネーター」設定について

5. 設備備品の調達について

• PBL型授業設備/ICT設備、健康づくりプログラム の調達について

6. 三菱総合研究所への調査依頼について

・具体的依頼事項の策定:「現在国内で進行中/準備 中の高齢化社会対策の研究活動一覧の作成と問題 点の整理について|

7. 第1回、第2回杏林CCRCフォーラムの準備状況について

・11月2日(土)は概要の説明を中心に行う。同時に杏林ラウンドテーブルとして連携三市市長などとの1部、三市実務関係者との2部構成とし、意見交換会を行う。11月30日(土)については講師に金田一教授の講演と、パネルディスカッション形式の討論会を予定している。同時に杏林コモンズとして市民の方と意見交換会を行う。

8. その他

- ・地(知)の拠点整備事業ロゴマークについて
- ・平成25年12月13日COCに採択された4大学による パネルディスカッション開催にあたり三菱総合研 究所より参加依頼があった。4大学とは高知大学、 東海大学、中部大学と本学の予定。参加者につい ては跡見委員長に一任をした。

平成25年度

第3回 杏林CCRC拠点推進委員会議事録

日 時:平成25年12月2日 15:30~16:30

場 所:三鷹キャンパス 医学資料情報センター 6階 大会議室

出席者:跡見、スノードン、松田、赤井、蒲生、古本、松井、相見、加藤、五十嵐、樋田、黒田、安藤、依田、

青柳、黒羽、井上(敬称略)

欠席者:大瀧(敬称略)

報告・審議事項

1. 第1回、第2回杏林CCRCフォーラムについて

- ・杏林CCRCフォーラム来場者人数報告(第1回11月2日(土)149名、第2回11月30日(土)120名)
- 2. 地(知)の拠点整備事業にかかる事業紹介文の作成・提供について

蒲生委員より文部科学省より依頼のあった事業紹介パンフレットの記事提供を行った旨報告された。

3. 設備備品の調達について

- 健康づくりプログラムの調達について
- PBL型授業設備/ICT設備見積もりについて

4. 研究活動について

- COC事業に関わる本学での教育、「地域と大学」「老年学」に関する調査を三菱総合研究所へ業務委託することが承認された。
- 人事関係について

客員研究員として三菱総研より松田智生氏が承認 された。

• FD・SD講演会の開催について

FD・SD講演会に三鷹市長、清原慶子様に講演を依頼した。講演テーマは「三鷹市と杏林大学:包括的な連携協定締結に際して(案)」を予定している。杏林大学三鷹キャンパスの大学院講堂を利用して行う予定。

• 研究所セミナーの開催と伴う謝礼基準および所定 用紙について 研究所セミナーの開催を第1回平成25年12月18 日、第2回平成26年1月17日、第3回平成26年2月 14日の日程で検討している。年間で10回程度を予定 し、学内外の関連分野の有識者に講演を依頼する。 開催に伴う各種書類基準案が提示され、承認された。

・地域志向教育研究経費募集要項について 来年度より開始される「地域志向教育研究経費」 の公募要項案が提示された。跡見委員長より研究費 選考委員長として蒲生委員が選出され承認された。

1)海外出張・研修計画について 平成26年2月1日から2月10日の予定で米国出張 の申請書が提示され、承認された。出張者は蒲生委 員と松井杏林CCRC研究所特任助教である。

- 5. **地(知)の拠点整備事業予算執行状況について** 予算の執行状況について説明がされた。
- 6. 地(知)の拠点整備事業工程表について 概ね事業は順調に進んでおり、各学部事務職員に対 するガイダンスを12月中に行う予定である旨、報告さ れた。

7. その他

教育の地域志向化に関し、「地域と大学」「プロジェクト演習科目」「ウェルネス科目群」「科目の地域志向化」それぞれ、段階的に進行中であるとの説明があった。

平成25年度

第4回 杏林CCRC拠点推進委員会議事録

日 時: 平成26年1月20日 16:00~17:00

場 所:三鷹キャンパス 医学資料情報センター 6階 大会議室

出席者:跡見、後藤、大瀧、松田、赤井、蒲生、古本、松井、相見、井上、加藤、樋田、五十嵐、吹野、黒田、

安藤、依田、青柳、黒羽、井上(敬称略)

欠席者:スノードン(敬称略)

報告・審議事項

1. FD·SD講演会について

平成26年1月22日(水)のFD·SD講演会は三鷹キャンパス大学院講堂にて17時半より三鷹市長 清原慶子氏を招聘し、ご講演いただく。この様子は八王子キャンパスK棟8階大会議室にて同時中継を行い、ひとりでも多い聴講を求めていく。

2. 地(知)の拠点整備事業 特別処置の追加交付 について

文部科学省より、次年度購入予定の健康づくりプログラム備品について、追加購入の打診があり、調書作成を行った。

3. 各種募集要項について

• 地域志向教育研究費公募要項

科研費的扱いとし、各研究員、教職員の活動を支援するものとして適用される。募集は平成26年2月 1日より末日までとする。

• 地域活動助成費公募要項

教育活動、社会貢献活動に対して適用される。同じく募集は平成26年2月1日より末日までとする。

• 地域交流活動支援事業公募要項

COC事業に当てはまらない地域交流活動に対して 適用される。

4. 平成25年度地域志向教育研究費の執行について

今年度については、蒲生委員、吉野教授、相見特任助教の3名からの申請を採択する。「生活習慣病の遺伝的背景に関する研究:高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点」を研究課題とし実施することが承認された。来年度より本格的に運用する。

5. 生きがいづくりコーディネーター制度の進捗状況について

平成26年度後期よりスタートするため内容を検討 中である。

6. 北陸地方COC採択大学への視察について

平成26年1月27日~1月31日の期間でCOC採択校である福井大学、富山県立大学、金沢工業大学へ視察出張を行うことが承認された。出張者は古本委員、石井准教授、太田教授、井手講師、依田課次長、黒羽課員である。

7. 次年度の事業計画について

事業推進にあたり人事についての説明がされた。

- 8. 地(知)の拠点整備事業予算執行状況について 予算の執行状況について説明がされた。
- 9. 地(知)の拠点整備事業次年度工程表について 現在の進捗状況と次年度の行程について説明がさ れた。

平成25年度

第5回 杏林CCRC拠点推進委員会議事録

日 時:平成26年3月3日 15:00~16:00

場 所:三鷹キャンパス 本部棟11階 貴賓室

出席者:跡見、スノードン、赤井、蒲生、古本、松井、相見、井上、加藤、樋田、五十嵐、吹野、黒田、依田、

青柳、黒羽、井上(敬称略)

欠席者:後藤、大瀧、松田、安藤(敬称略)

報告・審議事項

1. 米国出張報告

平成26年2月1日~2月10日まで蒲生委員、松井特任助教が米国へ出張し、米国CCRCの見学と CCRC関係者からの情報収集の報告がされた。

2. 研究所セミナー開催について

蒲生委員、松井特任助教による米国出張の報告を 兼ねた研究所セミナーが、平成26年2月28日に開催 された旨、報告があった。

3. 広報活動について

来年度の公開講演会は、三鷹市・八王子市・羽村 市の会場を用いて合計年27回行う予定である旨、報 告された。

4. 募集開始について

地域志向教育研究費の公募要領は文部科学省の承 諾が得られたので、学内で募集を開始することが承 認された。地域活動助成費についても同様に募集を 開始する。今月の教授会、専任者会議で周知し公募 を行う。

5. PBL型教室について

三鷹キャンパスと八王子キャンパスで整備を進め ており、各学部で活用していただきたい旨が報告さ れた。

6. 地(知)の拠点整備事業アンケートについて

全学生、全教職員、三自治体の代表者に対しアン

ケートを行う旨、報告された。アンケートの準備が 整い次第、配付実施する。

7. 「生きがいづくりコーディネーター」養成履修証 明プログラム事業実施要項について

「生きがいづくりコーディネーター」の事業実施について説明された。平成26年9月からプログラムの開始を予定しているため順次詳細を詰めていく旨報告があった。

8. 次年度人事について

杏林CCRC研究所、地域交流課ともに、松井特任助教、相見特任助教、樋口客員研究員、松田客員研究員、井上地域・大学間コーディネーターの5名を継続採用することが承認された。

9. 平成26年度調書について

申請書に基づき平成26年度調書を作成し提出する 旨報告された。引き続き事業遂行への協力を願う。

10. 地(知)の拠点推進事業予算執行状況について 事業計画に基づき順調に予算を執行している旨報 告された。

11. その他

平成26年1月28日~30日に実施した国内出張について古本委員より報告があった。

補助事業 成果報告 — 教育 ①

「地域と大学」講義

全学一年次必修科目として地域志向講義を盛り込む

本学では教育の地域志向化の一つとして、三鷹市・八王子市・羽村市の地域特性等を学びながら、各地域 課題において杏林大学が果たすべき役割をテーマとす る講義科目として、全学一年次必修科目「地域と大 学」を設けることとしている。

そこで平成25年度は、そのあるべき姿を探るため、 杏林CCRC研究所において本学全学部のシラバスを 精査すると共に、各地の大学、特に本学と類似の構成 と規模を持つ大学での「地域志向教育」の実施状況を 三菱総合研究所に委託調査した。また、各学部の教務 委員会と連携し「地域と大学」講義を平成26年度から 試行する準備を進めた。

以下は各学部の状況である。

① 医学部

平成26年度より一年次必修科目「医療科学A」において、「地域と大学」の教育内容を取り入れる準備が 完了した。

②保健学部

必修科目「保健学概論」(臨床検査・健康福祉・理学療法・作業療法)、選択必修科目(必修を指導)「ホスピタリティ論」(看護・養護)、必修科目「発達心理学」(看護)、「医学概論」(臨床工学・救急救命・健康

福祉)において、「地域と大学」の教育内容を取り入れる準備が完了した。

③ 総合政策学部

平成25年度に実施した「学際演習」において1クラス分の内容を地域志向化するとともに、学則改正を行って平成26年度入学生1年次必修科目に「地域と大学」、1年次以上選択科目として「プロジェクト演習」を設置した。また、「学際演習」の内容を一部地域志向化することで、地域を対象としたPBL型科目も準備した。

4)外国語学部

平成25年度秋学期「基礎演習-2」(1年次必修科目)の内容を一部変更し、地域志向化を行った。

また学則改正を実施し、平成26年度入学生1年次必修科目に「地域と大学」、2年次科目として地域を対象としたPBL型科目として「プロジェクト演習」(英語学科・中国語学科は選択科目、観光交流文化学科は必修科目)を設置した。

今後、「地域と大学」という講義のあり方について さらに検討を加え、各学部の教育の特性を生かしたう えで、全学で方向性を共有し、かつ学際的な内容とな るような構成を確立する予定である。





平成 25 年度外国語学部「基礎演習-2」

補助事業 成果報告 — 教育 ②

PBL型教室の整備

両キャンパスの既存の4教室を変更し、平成26年度以降本格運用開始へ

本学では、地域課題をテーマとした学びを通じて地域に対する意識を賦活させるとともに、学びのフィールドを地域社会に設定し、実社会での課題解決に学生が参画することを目的に、本事業における教育の地域志向化を進めていく。それにより、大学での「学びの実質化」と「短い周期で変容を繰り返す現代社会を生き抜くための『問題発見力』『問題解決発想力』『ファシリテーションカ』の涵養」を実学の形で達成し、地域社会を牽引する人材を輩出する基盤を構築していく。

そのために、さまざまな視点から物事を分析し、問題を発見し解決していくPBL (Problem Based Learning)型の講義 (外国語学部「プロジェクト演習」など)をこれまで以上に強化していくことを目的として、平成25年度は両キャンパスの既存の教室 (三鷹キャンパス看護・医学研究棟6階603~605教室および八王子キャンパスE棟1階103教室)をPBL型講義対応の教室に整備した。

三鷹キャンパスの教室が各10名程度、八王子キャンパスの教室が20名程度の定員となっており、それぞれ教職員・学生が作業するためのノートパソコンや、プロジェクター、電子黒板、ホワイトボード、グループ作業に適した作業机等が用意され、PBL型の講義を行う上で十分な設備が整った。八王子キャンパスのPBL型教室においては本学COC事業「杏林CCRC構想」の教育・社会貢献活動に関連する打ち合わせおよびゼミナール活動に使用した。

これらのPBL型教室は平成25年度の準備を経て、平成26年度以降は各学部の講義において本格的な運用が開始され、より充実した実効性の高い学びを展開していく。



三鷹キャンパス看護・医学研究棟6階605教室



電子黒板、プロジェクター、パソコン等設備が整った教室



八王子キャンパスE棟1階103教室

補助事業 成果報告 — 研究 ①

杏林CCRC研究所の新設

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマで計画書を申請し採択され、この事業を推進する中核的な施設として、10月1日付けでJR三鷹駅前産業プラザ内に「杏林CCRC研究所」を設置した。

研究所では以下のメンバーと共に具体的なテーマとして鳥瞰的な問題であり、また地域課題でもある高齢化社会における「生きがい創出」、「健康寿命延伸」、そして「災害に備えるまちづくり」を取り上げていきたいと考えている。

杏林CCRC研究所メンバー

蒲生 忍 所長 (兼 杏林大学保健学部教授) 研究分野:分子生物学 遺伝子解析 医療倫理

松井 孝太 特任助教

研究分野:政治学 米国を中心とした比較政治 社会保障・労働政策 少子高齢化社会の政治

相見 祐輝 特任助教

研究分野:遺伝子医学 分子生物学

樋口 範雄 客員研究員 (東京大学公共政策大学院 教授・法学政治学研究科教授)

松田 智生 客員研究員 (株式会社三菱総合研究所主席研究員・チーフプロデューサー)

多田 時枝 杏林CCRC研究所 事務局

平成25年度 杏林CCRC研究所 活動報告

月日	主催など	場所など	タイトルなど	参加者など
10月1日	杏林CCRC研究所	設置		
10月1日	松井孝太	CCRC研究所	採用	(特任助教)
10月1日 樋口範雄 CCRC研究所 採用		採用	(客員研究員)	
10月1日~ 東大本郷キャンパス 樋口先生・高齢者法授業補助		樋口先生・高齢者法授業補助	松井、樋口	
10月21日	CCRC研究所	CCRC研究所	三菱総研との打ち合わせ	蒲生、松井
11月8日	文部科学省	イイノホール	地域再生と地(知)の拠点として の大学への期待~大学と地域が 連携したひとづくり、まちづくり 地域再生への歩み~	蒲生、松井
11月11日	一般財団法人 私学研修福祉会	アルカディア市ヶ谷	私立大学の教育・研究充実に関す る研究会 (大学の部)	蒲生(古本)
11月16日	杏林医学会	杏林大学学生講義棟第 一講堂	市民公開講演会:加齢と医学~上 手な年のとり方	蒲生、松井、多田
11月21日	CCRC研究所	CCRC研究所	三菱総研との打ち合わせ	蒲生、松井
12月1日	相見祐輝	CCRC研究所	採用	(特任助教)
12月13日	三菱総合研究所	三菱総合研究所	COC採択校との意見交換会	蒲生、多田
12月13日	プラチナ社会 研究会	三菱総合研究所	プラチナ社会研究会「大学分科会」 特別セミナー〜 COCから始まる 地域と大学の同時改革〜	蒲生、多田

26

月日	主催など	場所など	タイトルなど	参加者など
12月18日	12月18日 CCRC研究所 CCRC研究		第1回研究所セミナー	蒲生ほか6名
1月1日 松田智生 CCRC研究所 採用		採用	(客員研究員)	
1月10日	CCRC研究所	CCRC研究所	三菱総研との打ち合わせ	蒲生、松井
1月23日 CCRC研究所 三鷹産業プラザ 702会議室 第2回研究所セミナー		第2回研究所セミナー	蒲生ほか11名	
1月25日	芝浦工業大学	芝浦工業大学 豊洲キャンパス	シンポジウム:「地(知)の拠点整 備事業」の採択を受けてほか	蒲生
1月27日	三菱総合研究所	日本橋三井ホール	プラチナ構想ネットワーク第7回 シンポジウム:社会を変える!プ ラチナソリューション	蒲生、松井、松田
2月1日~ 10日	_	シアトル・フェニックス、 サンフランシスコ	米国出張	蒲生、松井
2月13日	三菱総合研究所	三菱総合研究所 4階会議室	高知大学との意見交換	蒲生
2月20日	CCRC研究所	CCRC研究所	三菱総研との打ち合わせ	蒲生、松井、松田
2月20日	CCRC研究所	CCRC研究所	三鷹ネットワーク大学との打合せ	蒲生、多田
2 月28日	CCRC研究所	CCRC研究所	第3回研究所セミナー	蒲生ほか13名
3月7日	三菱総合研究所	三菱総合研究所	東海大学との意見交換	蒲生、多田
3月7日	RISTEX	日経カンファレンス ルーム	コミュニティで創る新しい高齢社会 のデザイン 平成22年度採択プロ ジェクト成果報告シンポジウム	蒲生、多田
3月14日~ 15日	_	広島市・尾道市	広島県出張	蒲生、松井、相見、 多田
3月15日	東京大学 高齢社 会総合研究機構	東京国際フォーラム ホールB5	活力ある超高齢社会へのロード マップ 2030/2060	蒲生
3月24日	第2内科	三鷹キャンパス	医療ネットワーク勉強会	蒲生、松井、相見
3月28日	CCRC研究所	CCRC研究所	三菱総研との打ち合わせ	蒲生、松井、松田

研究費の受入

蒲生 忍: 文部科学省科学研究費 基盤研究C

(代表)「米国ワシントン州の終末期医療と尊厳死について:今後の課題と我々への示唆を探る」

蒲生 忍: 文部科学省科学研究費 基盤研究C

(分担)(代表:下島裕美・保健学部「ケア提供者のための死生学教育ツールの開発」)

蒲生 忍: 文部科学省科学研究費 基盤研究C

(分担)(代表:佐藤徹・医学部「肺動脈性肺高血圧症患者試料を用いたBMPR2遺伝子のエピジェネティクス制御の解明」)

松井孝太:長寿医療研究開発費

(分担)(代表: 朴眩泰「健康長寿を実現するのに最適な日常活動パターンの解明に関する研究」)

補助事業 成果報告 — 研究 ②

杏林CCRC研究所セミナー報告

第1回 杏林C	CRC研究所セミナー
日 時	平成25年12月18日 18時00分~ 21時30分
場所	杏林CCRC研究所
講師	堤 正好(株式会社エスアールエル 学術企画部 学術情報グループ) 増井 徹(独立行政法人 医薬基盤研究所 難病・疾患資源研究部部長、政策・倫理研究室リーダー)
講演テーマ	「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」の改定について(堤氏) 包括的同意について:遺伝子解析研究等においてのインフォームド・コンセントのあり方について(増井氏)
概要	提氏は本年の倫理指針改定に委員として参加した。その際の議論の要点と、改定文書の解釈について解説していただいた。 増井氏は本年の「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」改定に委員として参加した。 今後のヒト資料を用いる遺伝子解析研究のあるべき姿について、特に遺伝子・細胞バンクによる包括同意の取得の意義について解説していただいた。 本勉強会では「包括的同意について」をテーマに平成25年2月8日改正告示された「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」を基に議論を交わした。 また、パイオバンクにて試料収集及び提供の一元管理が出来れば疫学・臨床研究の発展、研究再現性検証が期待できるなど議論した。本勉強会では、包括的同意が疫学・臨床研究の発展に寄与するものの昨今の疫学・臨床研究においてヒトゲノム・遺伝子解析は必然的であること、さらに提供者への配慮を踏まえ如何なる研究であれヒトゲノム・遺伝子解析を含めてインフォームド・コンセントを実施すべきと結論に至った。 講演終了後、当該指針について、また遺伝子解析の現場での問題点等についての活発な質疑と意見交換が行われた。

第2回杏椒	林C	CRC研究所セミナー		
B F	時	平成26年1月23日 17時30分~ 21時30分		
場	所	三鷹産業プラザ 702会議室		
講	師	大朝摂子 (三鷹市企画部企画経営課)、山口亮三 (三鷹ネットワーク大学事務局長)		
講演テー	マ	杏林大学と三鷹市の協働 ~特に研究の可能性について~		
概	要	山口氏より三鷹ネットワーク大学の概要や事業について解説していただいた。また、ネットワーク大学における市民講座の講師をCCRC研究所員ないし杏林大学のその他の部局の教員が務め、定期的な連続講座を提供する可能性についても提起され、議論が行われた。大朝氏は三鷹市と杏林大学、CCRC研究所との連携活動に関する提案をされ、三鷹市側の要望について述べられた。また、「少子高齢社会の未来像」「健康寿命延伸」「災害に備えたまちづくり」「生きがい創出」といった本学COC事業のテーマに関して、三鷹まちづくり総合研究所と研究会を共同設置する可能性が議論された。講演終了後、協働についての活発な質疑と意見交換が行われ、協力関係強化について今後も前向きに検討していくことを約束した。26年度教育プログラムとしては、医学部が1年生を対象に、主に三鷹市を中心にグループ学習を展開する予定であることを紹介し、三鷹市側に協力を求めた。		
参加。	者	大朝摂子、齊藤大輔、半田知冴 (三鷹市企画部企画経営課)、山口亮三、立花省二 (三鷹ネットワーク大学)、赤木美智男 (医学部)、黒田幸司 (八王子事務部)、古本泰之 (地域交流推進室)、蒲生忍、相見祐輝、松井孝太、多田時枝		

第3回 杏林CCRC研究所セミナー					
日		時	平成26年2月28日 15時00分~17時30分		
場		所	杏林CCRC研究所		
講		師	蒲生忍、松井孝太		
講演	: テー	- マ	米国出張報告 1. 出張の概要と訪問施設の特徴 2. 米国の高齢者の選択について 討論. 米国施設から学ぶもの		
概		要	松井孝太特任助教より、米国出張の概要とワシントン州シアトル市、アリゾナ州フェニックス市、カリフォルニア州サンフランシスコ市の訪問施設の特徴について報告があった。 蒲生忍所長からは、日本と米国における年齢社会構図や訪問先都市構図、規制緩和などを踏まえて米国の高齢者の選択について報告があった。報告終了後、副学長Paul Snowden教授も参加し、米国施設から学ぶものについて活発な質疑と意見交換が行われた。		
参	加	者	林田昭子(鷹ロコ)、濵絵里子(てとて)、山口亮三(三鷹ネットワーク大学)、Paul Snowden (副学長)、熊谷文枝(名誉教授)、萬知子、市村正一(医学部)、八木橋宏勇(外国語学部)、塚本悌三郎(大学事務部)、黒羽充(地域交流課)、蒲生忍、相見祐輝、松井孝太、多田時枝		

参加者 增井徹、堤正好、吉田有紀(東海大学医学部付属病院)、蒲生忍、相見祐輝、松井孝太、多田時枝

補助事業 成果報告 — 全体 ①

杏林CCRCラウンドテーブル

11月2日に第1回を開催、自治体等と地域課題を把握

杏林CCRCラウンドテーブルは本学と三自治体(三鷹市、八王子市、羽村市)、商工会議所等各団体の関係者が一堂に会して地域課題について話し合う場であり、地域内に存在するさまざまな課題を会議を通して吸い上げ、網羅的かつ詳細に把握するものである。

平成25年度の杏林CCRCラウンドテーブルは、平成25年11月2日の第1回杏林大学「地(知)の拠点整備事業」フォーラム「地域社会における大学の未来像一地域の持続的発展に向けて一」の開催時に、二部構成で行われた。

第1部は三鷹市長・清原慶子氏、羽村市長・並木心 氏、八王子市副市長・村松満氏、本学学長・跡見裕の 他、計11名が会し、約1時間ほど本学のCOC事業計 画や今後の連携の方向性、特にそれぞれの市の特性に 応じた連携のあり方について話し合われた。

フォーラム終了後の第2部では、第1部での連携の 方向性の懇談を受け、三市の企画経営課・企画政策 課・学園都市文化課などの実務担当者と、本学の地域 交流推進室・杏林CCRC研究所・地域交流課等の関 係者が集い、講演会の開催やそれに連動する杏林コモ ンズ活動等、今後の連携の具体的手続きについて意見 交換し、意向を確認する場となった。

また、ここで次回の「杏林大学・地(知)の拠点事業CCRCフォーラム」を八王子市で開催することが決定した。



ラウンドテーブル第 1 音





ラウンドテーブル第2部

補助事業 成果報告 — 全体 ②

杏林コモンズ

連携三市と平成26年度本格運用前の意見交換を行う

地域と本学関係者とのインフォーマルなコミュニケーションの場として連携三市市内に「杏林コモンズ」を設置し、「学びの場」の出張拠点や地域課題を吸い上げる場として機能させていく。平成26年度の本格運用に向けて、平成25年度は連携三市の関係者とその運用について積極的な意見交換を行った。

そして、平成25年11月30日の第2回杏林大学「地(知)の拠点整備事業」フォーラム開催に先立ち、第1回の杏林コモンズを開催した。フォーラムのパネリ

スト及び本学から蒲生杏林CCRC研究所長、古本地域交流推進室長、コーディネーターを務めた保健学部熊井准教授が出席し、三鷹市における児童虐待防止の市民活動について活発な意見交換が行われ、今後も継続して協力を進めることを約束した。また、平成25年度に3回実施した研究所セミナーにも、行政及び市民団体等からの参加者があり、三鷹市における杏林コモンズ活動の一部として位置づけることができた。







三鷹ネットワーク大学「杏林コモンズ」設置



杏林コモンズの様子



羽村市生涯学習センターゆとろぎ「杏林コモンズ」 設置

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ①

健康寿命延伸

健康づくりプログラム

1

羽村市における サイクリング同好会に関する報告

■実 施 日:1回目 平成25年4月13日

2回目 平成25年5月20日

3回目 平成.25年6月29日

4 回目 平成25年 7 月20日

5 回目 平成25年 9 月28日

6 回目 平成25年11月16日

7回目 平成26年3月22日

■担 当 者: 石井博之

保健学部 理学療法学科 准教授

目 的

羽村市ではこれまで市や市民会が主体となって、定 年後の体力低下と健康維持への対策としてサイクリン グ活動に取り組んできたが、その後発足した同好会が 継続して行い、この活動に本学が支援をしている。活 動の目的は、スポーツ障害を防ぎ、無理なく長く楽し むための乗り方やダイエット効果、体力アップにつな がる乗り方、さらに多様な身体障害に対応できる自転 車の調整やメンテナンス、フィッティングを学ぶこと である。

実施内容

無理なく長く楽しみながら、体力増進と健康維持を はかるためのサイクリング活動内容は次の通りであっ た。

- 1 回目(平成25年 4 月13日)
- 自転車の魅力
- 自転車で運動をするとは
- そのメリット・デメリット
- 2回目(平成25年5月20日)
- 自転車での運動効果

- 心拍計を用いたトレーニング
- 3 回目(平成25年 6 月29日)
- 自転車での運動効果
- 心拍計を用いたトレーニング
- ・心拍数とケーデンス (ペダル回転数速度) などの 関係
- 4 回目(平成25年 7 月20日)
- ・自転車に関する運動生理学基礎(体力とは、有酸 素運動と無酸素運動、筋力増強・維持など)
- 消費カロリーや脂肪燃焼に対する計算法など
- 5 回目(平成25年 9 月28日)
- ・自転車に関する運動生理学基礎(体力とは、有酸 素運動と無酸素運動、筋力増強・維持など)
- 消費カロリーや脂肪燃焼に対する計算法など
- 6 回目(平成25年11月16日)
- 自転車メンテナンス講習
- 自転車のメンテナンスとフィッテイングについて
- 7回目(平成26年3月22日)
 - 自転車メンテナンス講習
 - 自転車のメンテナンスとフィッテイングについて

実施効果

先のサイクリング講座受講者から結成された同好会のメンバーのみの自主的な活動も活発となってきた。 その理由として安全対策やサイクリングコースなどの 運用に対して経験値が増してきたことがあげられる。

平成26年3月まで継続して開いたサイクリングセミナーでは、大学の行事が土曜日に重なったこと、悪天候が重なったこと、厳冬期は自転車という活動に限界があることなどにより、実施できない月があった。今後はインドアでの活動などの工夫をしていく必要があると思われる。

2

生涯スポーツの機会 提供プログラム

■実 施 日: 1回目 平成26年1月31日

2 回目 平成26年 3 月27日

■担 当 者: 石井博之

保健学部 理学療法学科 准教授

目 的

学生および高齢者を含む羽村市住民に対して、生涯スポーツの機会提供を目指す。そのために、すでに運動の機会を持っている人に対してはさらに日常的にスポーツを実践できるよう支援を行う。運動習慣のない人に対しては、運動の導入と基礎体力づくりを支援する。健康に生活できる身体づくりを行う。

実施内容

● 1 回目(平成26年 1 月31日)

「スポーツ機会の提供プログラム」などの実施に向けて、羽村市関係者と協議を行った。今後の本学と市との協同について協議し、2つの方向性で取り組むこととなった。

1つめは本プログラムの市民への啓蒙活動である。 来年度の市民講座についてまず羽村市側が協議し、 次回にそれを踏まえて再協議することとなった。

2つめは既存の羽村市スポーツセンターなどで実施されているプログラムに対し、継続性やモチベーションを高めることである。このため、既存のプログラムの把握を行い、実施者との協議を行う。

● 2回目(平成26年3月27日)

地域住民へのプロジェクト開始のため、「地(知)の拠点整備事業」における「スポーツ機会の提供プログラム」などの実施に向けて、羽村市関係者と協議を行った。今後の協同について2つの方向性で取り組むこととなった。

まずは本プログラムの市民への啓蒙である。市民 講座などを来年度開講、運動と健康の関係について 理解を深め、個別相談を行った上で個別評価、プロ グラム導入を行うこととする。

2つめは既存の羽村市スポーツセンターなどで実施されているプログラムに対し、体力測定や評価、リスク管理を強化し、参加者への個別プログラムの質を向上させることにより、継続性やモチベーショ

- ンを高めるものである。これを踏まえて、
- ①定期的に運動している人を対象とした、個別評価 による適切な運動および再評価による運動効果の 提示
- ②運動習慣のない人を対象とした、運動の導入と基 礎体力づくりの支援
- の2つのプログラムを決定した。

■活動計画

- ●平成26年5月18日(日)までに実施内容などを記載 したパンフレットを作成し、まずは羽村市スポーツ センター利用者を対象に本プログラムを公示し、参 加者を募る。
- ●毎月1回土曜日の午前に羽村市スポーツセンターの 一室(会議室)を用いて実施した。
- ●参加者上限は①は1回6名まで、②は1回8名までとする。但し活動開始当初は①②とも4名を上限としたい。(機材使用などに慣れる必要があるため)
- ●状況に応じて、文部科学省「新体力テスト実施要項」などを用いた集団体力測定や体脂肪測定などを行う。

実施効果

来年度の健康づくりプログラムの方向性が決定した。 目標や本学の役割が決まり、推進する大きな力となっ た。生涯スポーツの機会を提供することにより、日常 的にスポーツを実践できるよう具体的な計画が立てら れた。



プログラム実施に向けての協議の様子

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ②

健康寿命延伸

八王子市平岡町 わくわく健幸教室

■実 施 日: 1回目 平成25年11月9日 4回目 平成26年1月25日

> 2回目 平成25年12月14日 5 回目 平成26年 2 月22日 3回目 平成26年1月11日 6 回目 平成26年 3 月22日

■担 当 者: 榎本雪絵 保健学部 理学療法学科 准教授

的

平岡町老友会(会長木住野啓治氏)が「健康増進の ための運動をしたい」と八王子市地域包括支援センタ 一子安の職員に相談したことがきっかけとなり、平岡 町老友クラブ会員を対象に開催されることになったが、 その目的は、平岡町在住高齢者(平岡町老友クラブ会 員)の健康増進のための健康教育および運動介入を行 い、実施期間終了後も住民主体で健幸教室などが開催 できるよう支援することである。

実施内容

平岡町在住の高齢者を対象に、健康増進に関する講 義、健康増進の運動として、セラバンドを用いた体操 を中心とした運動プログラムの立案と実践を行った。 運動効果の提示と動機づけのための定期的な体力測定 を毎月第2・4土曜日9:30~11:30の時間帯に平岡町 町内会館で実施した。リスク管理として参加者ごとに 健康ファイルを作成し、参加前の体調管理、血圧や脈 拍測定を実践した。

参加者に対しては、当日の血圧や脈拍、体調に関す

る問診票を確認し、必要に応じて八王子市地域包括支 援センター職員が血圧などを測定した上で、参加可否 を判断した。

参加受付後、安全で効果的に運動が実践できるよう 「運動の種類と強度について」をテーマとした15分ほ どの講座を行った。さらに、自宅でも安全に継続した 運動ができるよう、座位や立位で実施できるNHK 「みんなの体操」を用いた準備体操を行った。準備体 操において学生は、主に立位が不安定な参加者や運動 の実践に支援が必要な参加者に対して、安全確認や転 倒防止、運動指導を行った。また、ストレッチやセラ バンド体操においては、参加者の動機づけや運動効果 の向上や動機づけを目的とし、学生が参加者の関節や 筋を触診、および参加者に対して運動の留意点や目的 などを説明する機会を設けた。さらに、休憩時間など においては、参加者ごとの運動介入の目的や意義につ いて理解できるように、参加者の生活状況の聴取など も行えるようにした。

運動の後、整理体操とともに運動後の痛みや疲労の 聴取を行った。

● 1 回目(平成25年11月9日) -

「実施内容」に表記のとおり、基本のプログラムに則り実践した。





安全で効果的な運動の説明

● 2回目(平成25年12月14日)

1回目と同様のプログラムを実践した。



学生の支援によるストレッチ

セラバンド体操の様子

● 3 回目(平成26年 1 月11日) -

1回目・2回目と同じプログラムに加えて、定期 的な体力測定を実施した。体力測定の項目は、握力 と開眼片足立ち、Timed-up-&go-test、ファンク ショナルリーチ、5m歩行速度(至適・最速)とし た。Timed-up-&go-testと5m歩行速度(至適・ 最速)においては、数値の計測のみでなく動画撮影 を行い、参加者自身が姿勢や移動の様子を確認でき るように配慮した。また、姿勢測定として参加者ご とに画像撮影を行った。

各体力測定項目につき1~2名の学生が、測定の 実践および補助を担当した。学生の配置においては、 1項目のみでなく交代で担当し、できるだけ多くの 体力測定を実践できるよう配慮した。また、会場内 の移動において、監視や介助が必要な参加者につい ては、事前に監視や介助の必要性および介助方法を 指導し、適宜監視及び介助誘導の実践を行った。



学生による体力測定の補助

● 4 回目(平成26年 1 月25日) -

1~3回目と同様に基本のプログラムに則って実践した。この日は、八王子市役所介護保険課の職員の見学があり、また、八王子のケーブルテレビおよび読売新聞の取材を受けた。



ストレッチの様子

● 5 回目(平成26年 2 月22日) —

1~4回目と同様に基本のプログラムに則って実践した。この日は八王子市南新町町内会の役員5名の見学があり、この教室の目的や経過などについて説明を行った。



セラバンド体操の様子

● 6 回目(平成26年 3 月22日) -

1~5回目と同様に基本のプログラムに則って実践した。この日は3回目と同様の定期的な体力測定を実施した。3年生の参加学生は、各体力測定項目につき1~2名が、測定の実践および補助を行った。2年生の参加学生は、測定の補助を行った。また、平岡町老友クラブの会員のみで自主的にこの教室を開催できるよう、今後リーダー研修を併せて行うことを確認し、終了となった。



体力測定の様子

実施効果

参加者からは全ての回で、概ね好評を得た。学生からも好評であった。特に4年生で行われる臨床実習前の理学療法学科学生においては、有意義な機会となっている。

多くのメンバーが継続して参加できているので、平 岡町だけでなく他の地域在住の方を対象にした健幸教 室として、南新町の健幸教室開催も企画されることと なった。

さらに、教室の自主化にむけて参加者も意欲的になった。今後、八王子市地域包括支援センター子安の職員からの支援も期待され、連携して自主化を進めることになった。

● 1 回目(平成25年11月9日)

参加者からは「体の調子が良く、軽い。楽しく参加できているので、これからも続けていきたいと思っている。朝よりも教室が終わってからの方が、体が動きやすいことが実感できる。」、また学生からは「普段触れあることの少ない高齢者の方とのお話や実際に触れることができ、良い体験ができた。学校の授業では学べないことを実際に経験できるので、とても勉強になるし、楽しい。」との言葉があった。

● 2 回目(平成25年12月14日)

参加者からは「学生さんもやさしく接してくれて パワーをもらっている。」との言葉があった。また、 多くの学生の参加により、立位での運動の実践が促進され、参加者の運動継続や運動効果の向上が期待される。

● 3 回目(平成26年 1 月11日)

参加者からは「学生さんがきちんと説明して、測定の際もサポートしてくれるので、安心して体力測定を行うことができた。」との言葉があった。

● 4回目(平成26年1月25日)

参加者からの「学生さんとの交流の機会が持てて、 非常にうれしい。励みになっている。」との言葉があ り、継続した教室への参加が実践できている。メ ディアでの報道により平岡町のみでなく、他の地域 在住の方を対象にした健幸教室の開催も期待される。

● 5 回目(平成26年 2 月22日)

参加者の継続した教室への参加が実践できている。 この回からは2年生の学生2名の参加もあり、来年 度に向けた学生への参加が促されたと思われた。ま た、南新町町内会役員の見学により、南新町におけ る健幸教室開催も企画されることとなった。

● 6 回目(平成26年 3 月22日)

教室開催から8か月経過し、教室の自主化にむけて参加者も意欲的になった。八王子市地域包括支援センター子安の職員からも「この教室が住民自身で開催できるよう支援していきたい。」との言葉があり、連携のもと自主化をすすめることとなった。

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ③

災害に備えるまちづくり

救命救助法講習会等防災プログラム

人形を使ってBLS処置法を学ぶ

■実 施 日:1回目 平成25年6月3日

2回目 平成25年6月6日

3回目 平成25年6月10日 4回目 平成25年6月17日

5回目 平成26年3月7日

6回目 平成26年3月26日

■担 当 者:中島 義夫

保健学部 救急救命学科 助教

山﨑 章彦

保健学部 救急救命学科 助教

目 的

杏林大学保健学部を代表し、BLS(心肺蘇生)指導 を通じて中学生にも応急手当の重要性を伝える。実際 のBLSを体験することが目的である。

実施内容

羽村市、八王子市の中学校の生徒、教員に対し、 AED講習を実施した。各学校を回り、本学教員と学 生がAEDの使用方法をレサシアン(心肺蘇生訓練人

形) を用いて講義した。さらに、高大連携事業のひと つであるスプリングセミナーでは、高校生を対象に AED講習を行った。

- 1 回目(平成25年6月2日)羽村市立第三中学校
- 2回目(平成25年6月6日)八王子市立加住小中学校
- 3回目(平成25年6月10日)羽村市立第一中学校
- 4 回目(平成25年 6 月17日)羽村市立第二中学校 AED講習
- 5 回目(平成26年3月7日)八王子市立加住小中学校 AED講習 BLS指導
- 6 回目(平成26年 3 月26日)

スプリングセミナー (高大連携活動 八王子 キャンパスにて)

AED講習

実施効果

38

AEDの使い方を周知させ、不測の事態にも対応で きる人の増加を図れた。

レサシアンを使った救命救急の方法を実際にシミュ レーションすることで、救命救助法をより身近に感じ てもらうことができた。

受講後、「今後目の前で倒れた人に出会ったら、本 講習で習ったことを活かしたいですかしの質問に「は



講堂での AED 講習の様子



レサシアンを使った救命救急のシミュレーション

い」と答えた生徒が多数おり、生徒が命の尊さを知る 良い機会であった。

第64回全関東八王子夢街道 駅伝競走大会における 応急救護活動等への参加

■実 施 日:平成26年1月26日

■担 当 者: 岡部 綱好

保健学部 救急救命学科 講師

森 数美

保健学部 救急救命学科 学内講師

中島 義夫

保健学部 救急救命学科 助教

山﨑 童彦

保健学部 救急救命学科 助教

的

公道を走る駅伝大会としては国内最大規模を誇る 「第64回全関東八王子夢街道駅伝競走大会」の開催に 伴い、杏林大学保健学部を代表し、八王子消防署と連 携の下、救護所における応急救護及び走路における AED救護等を担当した。駅伝競走大会参加者等の安 心と安全の確保を図るとともに災害防備の観点から駅 伝の円滑かつ安全な運営に協力することを目的とした。

実施内容

八王子市からの依頼に基づき、以下の活動を実施し た。参加教員は、大会本部の救護所において救護活動 を実施した。また、現地救護所を巡回し、学生に対し て救護活動の監督及び指導を行った。AED担当の学 生は自転車にAEDを積載し、警戒区域を巡行した。 また、全長20.7kmの駅伝コースを1区~4区に分け、 各区を警戒区域に指定した上で、学生2人一組で自転 車による巡回を行い、駅伝選手及び観戦者の不測の事 熊に備えた。

救護所担当の学生は、駅伝の出発点及び中継所とな る場所に八王子消防署警戒員と連携して救護所を設置 し、不測の事態に備えた。大会本部のある南多摩中等 教育学校敷地内に本部救護所を設置し、教員3名と学 生4名で対応した。中散田中継所に中散田公園救護所 を設置し、学生5名を配置し、散田小学校中継所に散 田小学校救護所を設置し、学生5名を配置した。中継 所ではないが急坂を登りきった狭間駅前に狭間駅前救 護所を設置し、学生5名で対応した。

AED担当学生が警戒実施中、おぼつかない足取り で走っている走者に気づき、万が一に備え走者の後方 を自転車で伴走した。走者が路上に倒れこんだため、 走者の救護処置を実施した。倒れた場所が散田小学校 救護所の直近であったため、救護所に通報し、八王子 消防署警戒員と連携協力して救急隊に引き継ぐ活動を 実施した。

実施効果

八王子消防署と連携の下、救護所における応急救護 及び走路におけるAED救護等を担当し、ケガ人1名 が発生したものの他に大きな事故等の発生はなく、駅 伝競走大会参加者等の安心と安全の確保が図られ、駅 伝大会の成功の一助となることができた。





大会本部 南多摩中等教育学校前にて

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ④

災害に備えるまちづくり

第32回羽村市駅伝大会における 通訳(英語・タガログ語)案内係

■実 施 日:平成26年3月2日

■担 当 者:八木橋宏勇

外国語学部 英語学科 准教授

|

的

平成26年3月2日(日)に開催された「第32回羽村 市駅伝大会」において、英語・タガログ語が必要になっ た際に通訳案内業務を行い、災害防備の観点からイベ ントの円滑かつ安全な運営に協力することを目的とし た。

実施内容

午前8時に羽村市富士見公園に集合し、コース設置・ 撤去スタッフとして運営業務に従事した。レース開始



取材を受ける運営スタッフの学生

後は、コース監察員(コースに観客が入らないように 監察)として大会の運営に協力するとともに、選手・ 観光客として来ていた日本語非母語話者に対して、英 語・タガログ語で通訳案内業務を行った。

開会式において、本学学生が運営スタッフとして協 力していることがアナウンスされるとともに、第一 レースと第二レースの合間に、英語学科3年生の2名 がテレビはむらの取材 (杏林大学と羽村市の連携事業 について)を受ける機会もあった。

実施効果

災害・急患発生等の不測の事態が生じた場合、日本 語非母語話者は情報弱者になる可能性が高く、今回の 取り組み内容はそれを回避する備えとしての通訳案内 係業務であった。羽村市担当者からは、次年度以降も ぜひ継続的に協力してほしいとの要望をいただいた。



笑顔で運営業務に従事する学生

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ⑤

生きがい創出

子育て支援プログラム

保護者が幼児に 性教育を行うための支援

■実 施 日:平成25年8月29日 新川保育園(三鷹市)

(小金井市)

9月3日 ひなぎく保育園

9月4日 中央保育園(三鷹市)

9月5日 上連雀保育園(三鷹市)

9月6日 あけぼの保育園

子どもの家八栄寮 (児童養護施設、

八王子市)

平成26年3月7日 東京学芸大学附属

竹早幼稚舎(文京区)

■担 当 者: 土屋有利子

保健学部 看護学科 准教授

「いのちの大切さ」を伝えるために、三鷹市および 周辺の保育園に通う4~5歳児とその保護者を対象に 「いのちのおはなし会」を実施し、保護者と意見交換 を行った。これは(1)いのちはかけがえのない大切なも のであることを知る ②自分の身体を知り、守ること ができること一を目的としている。

実施内容

「いのちのおはなし会」では、いのちのはじまり (受精) から母親の子宮内で胎児が育つ様子を胎児人 形とパネルで示し、子どもたちに応援してもらいなが ら出産するまでの様子を学生の寸劇で説明した。身体

を守ることについては、男女の子どもの身体を示し、 違いを確認したうえでプライベートソーンを自分で守 ることを説明した。最後に子どもひとりひとりに胎児 人形を抱っこしてもらい、胎児の大きさや重さを実感 してもらった。その後、参加した保護者と意見交換を 行った。

保護者には、「いのちのおはなし会」の概要を記し た資料と小冊子「いのちやからだのこと どうこたえ る? |を配布した。

実施効果

参加した保護者には今回の感想と今後の要望につい てアンケートを実施(97部配布、26部回収・回収率 26.8%)。「子どもにわかりやすく使いやすい言葉を用 いていたのがよかった」「家庭でも子どもとごまかさ ないでお話ができると思う|「幼児にはまだ早いと思 っていたが、子どもが真剣に聞いている姿をみて、親 もきちんと子どもに向き合って接しようと思った 「親である、大人に性教育が必要だと感じた」「性教育 の情報を得たいと思っている親も多いので、今後もこ の活動を広めてほしい などの意見があった。

保護者の意見交換では、各家庭でどのように子どもに 対応しているのかお互いに知る機会となり、参考にな ったようだ。



子どもたちも参加しての学生による寸劇の様子

40

2

極低出生体重児親の会 「ぴあんず」

■実 施 日:1回目 平成25年5月11日

2回目 平成25年7月13日

3回目 平成25年10月26日

4回目 平成26年2月22日

■担 当 者: 吉野 純 保健学部 看護学科 講師

目 的

付属病院内ボランティア団体「ぴあんず」を中心に、1800g未満で出生し、NICU/GCUを退院した極低出生体重児を育てる家族の育児支援を行いつつ、子どもたちの発育、リハビリなどの情報を多くの家族が共有する。

実施内容

○1回目(平成25年5月11日)

「就園」をテーマに、就学について三鷹市特別支援 センターから講師を招き「子どもたちの健やかな成長 を願って」と題した講演とディスカッションを行った。 ② 2 回目(平成25年7月13日)

子どもの年齢別(乳幼児期と学齢期)に分かれてフ リートークを行った。

○3回目(平成25年10月26日)

「発達障害の子どもへの支援―就学から就労―」を テーマに小児科医師をプレゼンターに招き、勉強会を 開催した。 ○4回目(平成26年2月22日)

「子どものリハビリテーション」をテーマに理学療 法士、言語療法士を招いて勉強会を行った。

実施効果

勉強会では、親たちが現実の課題に直面している中、 積極的な質疑応答があった。講演では将来の課題につ いて認識することができた。また、専門家の話を聞く 機会はなかなか持てないため、このような場を提供で きたことはとても意義深い。

学生については、継続して参加する学生も多く、子 どもたちの成長過程を目の当たりにすることができて、 また実際に関わる難しさも感じながら、体験を通して 学び考える機会となっていた。学内の学びと学外活動 としての体験が融合し、かつ、学生の自発的な活動を 引き出していることは喜ばしいことである。

親たちからは、「子どもの面倒を見てくれて安心して勉強会に参加できる」「一生懸命さが伝わってきて好感が持てた」「毎回子どもが楽しみにしている」など好意的な評価を受けている。しかし、自分たちの行為が家族支援につながっていることについては意識が低い面も見受けられる。親からの意見をフィードバックし、また親たちの勉強会などへの参加も促しながら、育児支援への認識を高めていくことが重要である。

また、現在看護学科、医学部など三鷹キャンパスの 学生がボランティアの主体となっているが、保健学部 の他学科(作業療法学科や理学療法学科など)の学生 も、自己の専門性を深める機会となるため、積極的な 参加を促していきたい。





学生による育児支援の様子

3

妊娠期から生育期の多胎児支援 「多胎育児準備クラス」 「ツインズマーケット」

■実 施 日: 「多胎育児準備クラス」

1回目 平成25年7月6日

2回目 平成25年7月13日

3回目 平成25年10月19日

回目 平成26年1月11日

5回目 平成26年1月18日 「ツインズマーケット(第9回)」

〒 771 ンスマーケット (第9回 平成26年3月20日

■担 当 者:太田ひろみ

保健学部 看護学科 教 授

佐藤喜美子

保健学部 看護学科 准教授

佐々木裕子

保健学部 看護学科 准教授

山内 亮子

保健学部 看護学科 学内講師

鈴木 朋子

保健学部 看護学科 助 教

目 的

多胎児を育てる母親と家族が、妊娠中から医療者や 多胎育児経験者と交流を持つことで、出産前から多胎 の妊娠・出産・育児をイメージし、出産後の多胎児特 有の育児に関わる不安や問題の解決を、妊娠期から育 児期までの継続した多胎育児支援を通して図る。

また、多胎児の親や家族同士の交流ならびに多胎育 児の経験者が多胎育児中の親をサポートするピアサポ ート活動の要素も含んでおり、これから多胎児を育て る親、地域で多胎児を育てている経験者の両者にとって「生きがい創出」となることを目指している。

多胎家庭では一般家庭の3~4倍の発生率を数えるといわれる虐待については、妊娠期から出産期・育児期への切れ目のない支援が必要といわれている。そこで年に1度、「多摩地域のふたごサークルメンバーの交流会「ツインズマーケット」を開き、フリートーク、情報交換、フリーマーケットなどを行った。今年度で9回目の開催となった。

本活動の目的は、以下の3点である。

- 1. 相互支援 多胎育児という同じ悩みや課題を持つ 仲間に出会い、心を開いて話し合うことで不安や 孤立感を癒す。
- 2. 情報共有 多胎育児に関する情報を交換する。
- 3. 学習・相互教育 体験を学びあうことで、家庭での対応の工夫だけでなく、関係職種との信頼関係や制度、施策の大切さを確認し、知識を得る。

実施内容

多胎育児準備クラス

産科医師による多胎の妊娠出産の基礎知識の提供

多胎妊娠の種類、膜性診断、多胎妊娠のリスク等を中心に妊娠中に起こりやすい異常について説明した。また、多胎妊婦の多くが適応となる帝王切開について、 出産の時期や入院期間等についても説明があった。

先輩ママ・パパの体験談 多胎育児経験者 1 組に、 多胎妊娠中、入院中、出産時、育児中の気持ちや生活、 ふたごの親になって思うことなどを妻・夫の立場でそれぞれ自由に語った。

助産師の話 多胎妊娠期の妊婦の生活と過ごし方、 入院中の過ごし方と退院後の生活について写真をスラ イドで示しながら説明。多胎の妊娠中、切迫早産や妊



交流会によるフリートークの様子



妊婦の生活と過ごし方を説明する助産師

42

娠高血圧症候群などで入院期間が長期間に及んだ場合や、出産後に乳児がNICUに入院になった場合とならなかった場合などを想定して、生活や授乳の仕方などについてアドバイスがあった。

多胎育児家族の交流 多胎育児経験者にピアサポーターとして参加してもらい、地域ごと、初産、経産、 父親のグループに分かれて情報交換、意見交換を行った。

学生は、両日とも多胎育児経験者である先輩ママ・パパと一緒に参加した多胎児およびその兄弟姉妹の保育、グループワークの記録を担当した。

ツインズマーケット (第9回)

講演会と情報交換会、バザーを実施した。講演会では本学の卒業生であり、現在、青梅市立総合病院で助産師として働いている川上千佳氏に、「ふたごで生まれ育った私 ―助産師となって今思うこと―」というテーマで講演をいただいた。

実施効果

多胎育児準備クラス

妊婦や家族は、医師や助産師の話からふたごの妊娠・出産について理解できたとしており、妊娠期の生活をシミュレーションしていた。先輩ママ・パパの話からは「同じ多胎ママ・パパと話すことで大変さを受け入れることができる」「出産後のイメージがわいた」など、当事者の体験談がふたご育児のイメージづくりに役立ったことがうかがえた。

多胎育児経験者は、自分の妊娠中に情報がなくて困った経験や、自分の経験が少しでも役に立てばとの思いから参加しているが、多胎妊婦や家族と接する中で

初心に戻れてよかったなど、自分の子育てを振り返り 気持ちをリフレッシュする機会にもなっていた。

参加した学生たちは、医師・助産師の話を聞くことで多胎妊娠・出産について学習する機会となっており、保育を通して幼児の特徴やふたごの関係性などを学んでいた。また、グループワークを通して多胎妊婦の不安や、多胎育児の大変さを学び、多胎ケアについて妊娠期からの継続の必要性も学ぶ機会になった。

ツインズマーケット (第9回)

参加者は、ふたごに生まれた当事者の話が聞けて、 参考になったなど概ね好評だった。フリートークや情報交換では、同じ悩みを共感できた、それぞれの育児 の工夫など聞けて良かったなど、当事者にしかわからない課題を解決できる場として、また困ったときに相談できる人が身近にいることに気づく場として意義があった。

参加した学生たちは、保育を通して幼児の特徴やふたごの関係性などを学んだ。さらに、実際の保育を体験することで、子どもの特徴や保育技術の実践、また親の気持ちや親の偉大さなどを感じたようだ。また、母親たちが育児に対する様々な不安を抱えており、それを共有できる今回のような場は大切であると、この会の意義が理解された。



家族同士の交流会の様子



ツインズマーケットに参加した学生

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ⑥

生きがい創出

八王子市老人クラブ連合会会合における アロマテラピーによる交流

■実 施 日:平成26年3月16日

■担 当 者: 西村 伸大 保健学部 臨床検査技術学科 講師

目 的

この活動は、地域交流の一環として継続している活動の一つであり、八王子市老人クラブ連合会の方々とアロマテラピーを介して交流を深めることを目的としている。

アロマグッズ作製によって、①手先を使うことによる脳の活性化、②香りによるリラックス効果の期待、 ③興味を持って積極的に参加するという「生きがいの 創出」、などに加え、学生のコミュニケーション能力 の向上も目的としている。

実施内容

これまでも好評であったアロマテラピーを用いた本学と八王子市老人クラブ連合会(八老連)の方々との定期交流会を八王子市台町市民センターで開催した。初めにアロマテラピーの材料を用い、簡単な作製手順、注意事項の説明を行った。その後6テーブルに分かれてグループごとに本学学生スタッフを配置し、手でこ

ねるアロマ石鹸の作製を実施した。

また、学生は八老連の方々とのコミュニケーションを積極的に図り、和やかな雰囲気で楽しく作業に取り組んだ。さらに2人ずつのペアになり、アロマオイルを用いたお互いのハンドマッサージを実施した。ハンドマッサージはデモンストレーションを行い、注意事項を説明した後、事前に講習を受けた学生スタッフが会場内を巡回し、質問を受けながらアドバイスを行った。

実施効果

八老連の方々は終始楽しまれ、学生にも積極的に話 しかけてくださるなど、有意義な交流会が実施できた。 今回も好評で、ぜひ次回もと依頼を受けたので、次年 度も実施を予定している。



アロマグッズ作製手順の説明



アロマグッズを作製する参加者

補助事業 成果報告 — 社会貢献活動 ⑦

生きがい創出

若者フォーラムの実施に向けた 羽村市内見学会

■実施日:平成26年2月5日

■担当者:木暮健太郎 総合政策学部 准教授

目的

羽村市在住の若者(18歳~39歳)、羽村市の職員、および総合政策学部の木暮ゼミナールとの連携によって活動しているプロジェクト「若者フォーラム」は、様々なイベントや企画を通じて、若年層が「街づくり」に関与する機会を提供し、市政への関心を高めることを目的としている。

杏林大学の参加者を拡大し、羽村市の産業、観光資源などの現状を把握、今後の羽村市・杏林大学連携事業に活かしていくことを目的として、「羽村市内見学会」を実施した。

実施内容

市内見学会で最初に訪問したのは羽村市営の「羽村 市動物公園」であった。羽村市の活性化を考える際に は、コアとなりうる場所の一つである。

続いてマミーショッピングセンターを訪問した。古くから地域に根付いた商店街だが、老朽化が進み集客という点では多くの問題を抱えている。しかし経済産業省による商店街再生を目指すプロジェクトで予算を獲得したことからリノベーションも進み、動物園から



羽村市動物公園を訪問する参加者

も徒歩圏内ということもあって、コミュニティの再生 という点では、極めて興味深い可能性を持った商店街 であることが明らかとなった。

さらに自然に恵まれた羽村市のイベント「はむら花と水のまつり」の会場となる玉川上水沿いや羽村堰周 辺を視察した。

最後に、羽村市職員と学生とのフリーディスカッションが開催され、学生から羽村市に対する印象を含め、市の活性化に関する多くの意見や感想が出された。ある学生は「羽村市内で、栄えて華やかな所と廃れて閑散とした場所があり、今後例えばマミー商店街に何かユニークな企画を提案できるようなことがしてみたい。」と語り、企画政策課の職員からは「市の職員だけでは内向きな案が多くなるので、今後は杏林大学の学生のような若い人達から斬新なアイディアを頂戴したい。」との言葉を頂き非常に意義のある意見交換の場となった。

実施効果

市内見学会で羽村市を実際に見学することを通じて、 学生たちの問題意識や関心は明らかに高まった。フリーディスカッションでは学生から羽村市に対する印象 を含め、市の活性化に関する多くの意見や感想が出され、活発に議論が展開され、今回の見学が学生にとって貴重な経験となり、今後の羽村市との連携事業に活かされることが期待される。



学生とのフリーディスカッション

大学の志向と地域のニーズをマッチングさせ具体的な事業を展開

地域・大学間コーディネーター 井上 晶子



大学COC事業における大学の社会的な役割は、地域の課題(住民の意向を反映した自治体の課題)に対し、大学が有する "知の財"を活かし、"地の財"となる継続的活動を展開することと捉えております。

そこでの地域・大学間コーディネーターの役割は、地域に目を向けた教育・研究・社会貢献 を展開しようとする大学側の志向と、活力と生きがいに満ちた高齢社会を構築しようとする地 域のニーズとのマッチングを行い、具体的な事業に結びつけることでした。

平成25年度は、

- ①健康寿命延伸のための新プロジェクトの開始
- ②学生が地域を理解し、地域関与へのモチベーションを高めるための羽村市内見学会および行政との意見交換
- ③活力ある高齢社会構築に必要とされる若者の地域への関心を高めるための、本学学生・教員 と自治体との協働啓発活動
- ④学生の能力と感性を活かした各種イベントへの参画
- などを行ってまいりました。

地域が大学や教員に寄せる大きな期待、その期待に応えるための教員のチャレンジと課題に取り組む学生の真摯な姿、これらを背後から支える職員の努力があっての各事業の展開でもありました。

また、平成25年度は、新たな事業を進めるためのいわばアプローチの段階であり、主に羽村市を対象とした活動を行ってきましたが、本事業開始以前から積み重ねられてきた市と大学の連携関係があることによって、これら事業のスムーズな展開を見ることができ、地道な活動を通じた長年の関係構築の重要性を実感しております。

平成26年度は、八王子市・羽村市内に設けられる、大学と住民の交流の場である"杏林コモンズ"を拠点として、平成25年度の協議事項を実施に向けて大きく前進させる年度となります。 また、三鷹市とは、従来の連携事業の拡充とともに、平成28年度のキャンパス移転を見据え、学生が主体となる地域に密着した新たな連携事業を進めるためのコーディネートを行ってまいります。

これまでのコーディネーター活動を通じて、COC事業を大学、地域両者にとってより意義 ある事業とするためには、各組織内における既存の枠組みを超えた内部連携と、各組織間にお いてはそれぞれの持つ既存のシステムや考えにとらわれない、柔軟な発想と対応による協力関 係の構築が、今後一層求められるであろうと考えております。

第1回 杏林大学 「地(知)の拠点整備事業」フォーラム

地域社会における大学の未来像

―地域の持続的発展にむけて―

■日 時:平成25年11月2日(土)13:30~16:00

■場 所:三鷹ネットワーク大学

■**後** 援:文部科学省、三鷹市、八王子市、羽村市

■内 容: 開会挨拶 文部科学省 地(知)の拠点整備事業:

「新しい都市型高齢社会における大学の統合知の拠点」の採択にあたり

学 長: 跡見 裕

三市からのご挨拶 三鷹市長: 清原 慶子 氏

 八王子市副市長:
 村松
 満 氏

 羽村市長:
 並木
 心 氏

報告「杏林大学の地域交流活動の現状と今後の展開について」

地域交流推進室長 古本 泰之

基調講演 「高齢化社会における大学の統合知の役割:杏林CCRC研究所の目指すもの」

杏林CCRC研究所長 蒲生 忍

閉会挨拶 杏林学園副理事長 松田 剛明

平成25年11月2日(土)、第1回「地(知)の拠点整備事業」フォーラムを三鷹ネットワーク大学において開催した。大学COC事業に本学が平成25年度に採択されてから、初めての開催となった。第1回フォーラムでは、今後の本学と地域とが連携した取り組みや推進体制等について紹介した。当日は三鷹市、八王子市、羽村市の市長等関係者や市民、それに本学の教職員や学生等あわせて約150人が参加した。

開会の挨拶に立った跡見裕学長は、三市にこれまでの協力についてお礼を述べたあと、本学の事業計画について説明をおこなった。その上で、「アメリカでは1つの敷地の中で健康時から介護時まで継続的にケアを提供する高齢者コミュニティ(CCRC=Continuing Care Retirement Community)が広がりを見せている。それを日本型モデルとして検討し、超高齢社会を迎える中で、大学の教育・研究資源を動員し、行政・地域社会・地域産業体、シンクタンクを巻き込んだ日本型CCRCが発信出来ればと願っている」と構想を語った。

続いて、三鷹市の清原慶子市長、八王子市の村松満 副市長、羽村市の並木心市長からこれまでの本学との 連携事業に触れながら今後の事業展開に期待する挨拶 をいただいた後、古本泰之地域交流推進室長が「杏林 大学の地域交流活動の現状と今後の展開」のテーマで 報告した。本学の地域交流活動の経緯を述べた後、今 回採択された本学の提案の概要を説明した上で、「大学は様々な地域の課題をパートナー団体等と協議し、本学の教育・研究資源を活用して解決策を提示し、その成果をこうしたフォーラムで報告していきたい」と今後の方針を述べた。

続いて、蒲生忍杏林CCRC研究所長が「高齢化社会における大学の統合知の役割:杏林CCRC研究所の目指すもの」と題して講演を行った。蒲生所長は「アメリカ型のCCRCに対して、私たちは地域の現状に合わせてより広い意味に捉え、研究所をCenter for Comprehensive Regional Collaboration、即ち"杏林大学の知を地域社会と統合的に協働させる拠点"として、高齢社会において三市が直面することが想定される『生きがい創出』『健康寿命延伸』そして『災害に備えるまちづくり』を研究テーマとして取り上げていきたい」と研究所の方針を述べた。

この日はフォーラムを挟んで本学と自治体等の関係者が地域課題を話し合う杏林CCRCラウンドテーブルが開催され、フォーラム開始前の1部では跡見学長等と三市の市長等による懇談が、フォーラム終了後にはそれぞれの実務担当者が一堂に会して今後の協働を約し、次回のラウンドテーブルを来年、八王子市で開催することを申し合わせた。

当日は予想を大きく上回る参加者数となり、盛況のうちに終了した。



杏林大学学長 跡見 裕



三鷹市長 清原 慶子 氏



八王子市副市長 村松 満 氏



羽村市長 並木 心 氏



フォーラムポスター

第2回 杏林大学「地(知)の拠点整備事業」フォーラム

街じゅうみんなで

―地域で子育でを支え、虐待を防止するために―

時:平成25年11月30日(土)14:00~17:00

所:三鷹ネットワーク大学

援:文部科学省、三鷹市、八王子市、羽村市

容:講演「子どものことば」

外国語学部教授

金田一秀穂

熊井 利廣

濱仲 純子 氏

清水 節子 氏

向井 百重 氏 小林 七子 氏

加藤 雅江

パネル討論会

コーディネーター 保健学部准教授

三鷹市子ども政策部子育て支援課長

パネリスト

三鷹市子ども家庭支援センター長 三鷹市民生・児童委員協議会会長 NPO法人子育てコンビニ代表理事

医学部付属病院医療福祉相談室課次長

平成25年11月30日の第2回フォーラムは、「街じゅ うみんなで ―地域で子育てを支え、虐待を防止する ために― | をテーマに行われた。

全国の児童虐待件数の増加に伴い、虐待未然防止の ために今まで以上にきめの細かい、そして地域を挙げ た子育て支援を進める必要があることをうけ、三鷹市 が子ども家庭支援センターの開設など、早くから積極 的な子育て支援、児童虐待防止活動を進めてきた経緯 から、今後さらに地域を挙げて街じゅうで子育てを支 援する為にどうしたらよいか、そして大学には何が求 められるかを地域の皆さんと共に考える機会とした。

会場には近隣住民、行政・大学関係者を中心に100 人以上が集まり、活発な議論が展開された。開会挨拶 は本学のスノードン副学長、閉会挨拶は蒲生杏林 CCRC研究所長がおこなった。

第一部では外国語学部金田一秀穂教授により「子ど ものことば | と題して、地(知)の拠点事業と生涯学 習について、子どもの日本語について、また、生涯学 習については「学力」とは何か、人間にとってなぜ言 葉が必要であるかを講演した。そして、「子どもの言 葉の発達において大事なのは慌てないこと、さらに無 理をさせず、曖昧なところをはっきりさせていく過程 を待ってあげることが必要である。」と結んだ。

第二部のパネルディスカッションでは、保健学部熊 井利廣准教授から「子育ての環境は高度成長期のあと 大きく変化し、児童虐待の件数の増加も環境の変化が ひとつの要因であると思う。三鷹市は子育て支援に関 して全国に先駆けて取り組んできた。子育て支援に関 して大学がどのような役割を果たせるのかを考えてい きたいので、そのために現状の取り組みを紹介して頂 きたい。」という説明がなされた。

パネリストからは、三鷹市の子育て支援の現状、子 ども家庭支援センターの活動、民生児童委員について、 子育てコンビニのNPO活動、本病院における児童虐 待問題への取り組みが紹介された。

各パネリストの報告後は、熊井利廣准教授からの質 問や、会場一般参加者からの質問をもとに活発な意見 交換が行われ、虐待に至らないようにするための取り 組みの中で、幼少の段階で虐待を防ぐことが重要であ るなどの指摘がされ、非常に意義のある時間となった。



副学長 ポール・スノードン



三鷹市子ども家庭支援センター長 清水 節子氏



医学部付属病院医療福祉相談室課次長 加藤 雅江



外国語学部教授



三鷹市民生・児童委員協議会会長 向井 百重氏



保健学部准教授 熊井 利庸



三鷹市子ども政策部子育て支援課長 濱仲 純子氏



NPO 法人子育てコンビニ代表理事 小林 七子氏



杏林 CCRC 研究所長 蒲生 忍



パネル討論会の様子

rD·SD活動

三鷹市との協働・連携を一層深める

―三鷹市長 清原慶子氏による講演会―

本事業を推進していく上での学内周知を進めることを目的としたFD (Faculty Development)・SD (Staff Development)活動として、平成26年1月22日(水)、清原慶子三鷹市長をお招きし、「杏林大学と三鷹市の更なる協働に向けて〜三鷹のまちづくりと杏林大学への期待〜」と題し講演を頂いた。講演会は、三鷹キャンパス大学院講堂で行われると同時に、同キャンパス臨床講堂、八王子キャンパスK棟8階大会議室にもTV中継され、合計約330人の教職員が集まった。

清原市長は、三鷹市の文化施設や特徴ある施策など を紹介しながら、三鷹市の『自治基本条例』において 「市民のためのまちづくりを進めるとともに、まちづ



八王子キャンパス



三鷹キャンパスの様子

くりを担う多くの人々が参加し、助け合い、そして共に責任を担い合う協働のまちづくりを進めることを基調とし、魅了と個性のあふれるまち三鷹を作ることを目指すものである。」と明文化されている点に触れ、これに基づいて2010年代の現在は都市の再生・コミュニティ創生を重要なプロジェクトに据えていると語った。また、三鷹市と本学との関係として、数多くの市の事業に本学教職員が参画していることを具体的な事例を挙げて紹介され、三鷹市が取り組んでいるさまざまな事業において本学関係者が立ち上げの段階から協働していることが改めて確認された。

さらに、本学が「地(知)の拠点整備事業」に採択されたことを契機として、三鷹市としてスポーツ推進事業や生涯学習の機会と場の提供をはじめ、コミュニティ創生等の三鷹市の「民学産公」のまちづくりにおいて、杏林CCRC研究所との共同研究および地域交流に係る協働の取り組みを進めていき、これにより文系 2 学部の社会貢献による価値の創造、三鷹市と連携した地域研究や交流の促進、研究活動の充実、大学の幅広い専門領域を生かしたまちづくりの研究に新たな効果がもたらされるといった今後の展望を語られた。

本学からは、跡見裕学長・松田剛明副理事長より、 三鷹市との協働・連携を今後より一層深めていくとい う本学の方針があらためて提示された。



三鷹市長 清原慶子氏

FD・SD活動

事業の理解とビジョンの共有を図る

一職員研修会—

地(知)の拠点整備事業の採択を受けて、平成25年度は本事業の趣旨および本学の地域志向の方向性について、学内の周知を図った。本事業では地域志向への全学的な取り組みが求められていることから、事業に直接携わる部門のみならず、教職員全体での事業への理解やビジョンの共有が必要といえる。

そこで、平成25年12月20日、八王子キャンパスの 事務職員全体を対象とした本事業に関する説明会を実施した。教務課、学生支援課、入学センター、キャリ アサポートセンターなど各部署より総計40名が参加 した。

説明会では、本事業の概要と現状についてまとめた「学内手引き(平成25年度版)」を配布した上で、古本泰之地域交流推進室長が、地(知)の拠点整備事業申請の背景および杏林CCRC事業のテーマとして掲げ

た「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」など事業全体の方向性を示した上で、新たに設置した杏林CCRC研究所の役割や、研究・教育・社会貢献の地域志向化の方向性、平成25~26年度に予定されている取り組み内容、地域志向教育研究費の位置づけ、連携三市との関係などについて説明を行った。

その後質疑応答を行い、個別の取り組み内容に対する質問に加え、各部署がそれぞれの立場から本事業に どのように関われる可能性があるかなど、積極的なや りとりがなされた。

このほかにも、本事業採択以降、杏林CCRC研究所・地域交流推進室・地域交流課など関係部署と、教務課・広報企画調査室など学内他部署とが、本事業のより積極的な展開のために協議を繰り返しており、連携がさらに深まっている。



G棟大会議室にて



事業紹介パンフレット

出張 報告

米国ワシントン州シアトル市、アリゾナ州フェニックス市、 カリフォルニア州サンフランシスコ市 視察・意見交換

君 程: 平成26年2月1日(土)~10日(月)

訪 問 者: 蒲生 忍(杏林CCRC研究所長・保健学部教授) 松井 孝太(杏林CCRC研究所・特任助教)

目 的

平成25年度「地(知)の拠点整備事業」の一環として、新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点となるアメリカの3都市の老人施設を視察し、日本での参考とする。

出張日程

2月1日成田発。同日米国ワシントン州シアトル着2月2日翌日からの視察に向けてネット等での情報収集とUniversity of WashingtonでMcCormick博士との打合せ

2月3日 施設訪問

Aljoya Thornton Place Ida Culver House Broadview Foundation House at Northgate Senior Housing Assistance Group-Victoria Park 2月4日 アリゾナ州Phoenixに移動

2月5日 施設訪問 Royal Oaks

Grandview Terrace

Sun Village

Sun City

2月6日 McCormick博士と訪問施設の概要に関し

てDiscussion

2月7日 カリフォルニア州San Franciscoへ移動

2月8日 施設訪問

California Pacific Medical Center Buddhist Churches of San Francisco

Kimochi Home

Kokoro Assisted Living

2月9日 帰国

2月10日 成田着



Aljoya Thornton Place



Foundation House at Bothell

出張内容

米国の老人施設の概要を把握するため下記の日程により、研究所蒲生と松井の2名が米国シアトル市、フェニックス市、サンフランシスコ市の3市に出張した。

シアトル市とフェニックス市では、以前より交流の あるワシントン大学医学部のThomas McCormick 博士の好意あふれる案内で、Independent Living のみの施設(Senior Housing Assistance Group-Victoria Park)からAssisted Living、Skilled Nurse Care Unit (Aljoya Thornton Place)、さらに認知 症に対応するMemory Unitを持つ施設(Ida Culver House Broadview)、また入居時に費用について相当 の一時金を預託する施設から一時金は小額の施設まで 幅広い選択肢を見学できた。フェニックス市は温暖で 乾燥した気候で数十年前から高齢者の居住地として好 まれている。特にSun Cityを中心とする地域は居住 者の年齢を50歳以上に制限するという特異な地域であ り、現在も膨張し続け、多様な居住形態が可能である。 その中で多数の施設が高齢者に最適化した居住・介護 サービスへの提供に努力しているのが印象的であっ

サンフランシスコ市ではCalifornia Pacific Medical CenterのJulie HANADA氏の案内で特に日系人が居住する地域の施設を見学した。HANADA氏とも数年来の交流があり、今回は特にBuddhist Church of SFの住職Kobata氏をご紹介いただき、非常に丁寧なご対応をいただき、近隣の高齢者施設にもご案内いただいた。今回は一日のみの短い訪問であったが、米国の日系社会が歴史的な背景からきわめて特殊な社会であることが理解できた。この訪問で得た情報と人脈等

を活用し、今後、その高齢者介護と将来像の見通しに ついて、さらに接触を維持し検討したい。

なお、この訪問でのキーとなる概念は次の幾つかに 集約できると考える。それぞれについて別にまとめて 研究所紀要等で公開する予定である。

訪問施設の概要

以下が今回の主な訪問施設の概要である。いずれも 多くの有益な情報を得ることができた。

1 Aljoya Thornton Place

(Seattle、2月3日訪問)

Ms. Mariah Reagan (Community Relations Counselor) に説明を受けた。"Aging in place"(住み慣れた場所で可能な限り長く生活する)という観点を追求し2009年にオープンした、新しいコンセプトのCCRCである。入居者はentrance feeに加えて、毎月の費用を払う。Independent Living (IL)の部屋を基本としつつ、入居者の医療介護ニーズの変化に応じて必要な人員・設備を導入することにより、同じ部屋に居住したままAssisted Living (AL)やSkilled Nursing (SN)のケアを受けることができる点に特徴がある。

(2) Ida Culver House Broadview

(Seattle、2月3日訪問)

Mr. Greg Byrge (Executive Director) に説明を受けた。1990年設立のオーソドックスなCCRCである。IL、AL、SNのエリアに分かれており、Aljoyaと異なり、入居者は医療介護の必要性の変化に応じて移動する。医療介護の必要性がまだ低く、



Buddhist Church



Royal Oaks

自律した生活を特に重視する入居者のためのコテージ型のILや、物忘れ・認知症が進んだ入居者のケアに特化したフロアも設置されている。

3 Foundation House at Bothell

(Seattle、2月3日訪問)

Mr. & Mrs. Loren Arnett (Resident) に説明を受けた。Seattle Education Foundationによって設立された、ILのみの高齢者住宅である。食事等のサービスは提供されるが、生活補助や医療介護ケアの必要性が生じた場合は、外部のサービス・施設を利用する必要がある。Entrance feeは無く、月々の居住費を支払う。費用はAljoyaやIda Culverと比較すると低く設定されている。

④ Victoria Park (Seattle、2月3日訪問) Mr. Victor Chin (Community Manager) に 説明を受けた。 Foundation House同様、ILのみの高齢者専用住宅であるが、周辺の通常の住宅と比較しても居住費が低く設定されている点に特徴がある。食事や医療介護などのサービスは存在せず、基本的には住居や交流の場を提供するだけである。運営母体が持つ他の高齢者住宅の中には、入居者を低所得者に限定することで税制上の優遇を受けるものもあるが、本施設は所得制限が無いタイプであり、居住者の中には比較的高所得者もいる。

(Phoenix、2月5日訪問)
 Ms. Kendra Eberhart (CEO) 及びMr. & Mrs.
 Fred MacFarlane (Resident) に説明を受けた。630
 人の居住者に対して350人の職員を抱える高サービスのCCRCである。医療介護ケアのニーズに対応したIL、AL、SNの全ての設備人員に加えて、物忘れ・認

知症の入居者ケアのためのエリアも設置されている。 コテージ型など入居者の多様な希望に対応して様々な タイプや広さの住居が用意されている。

⑥ Kokoro Assisted Living & Kimochi Home (San Francisco、2月8日訪問)

Rev. Ronald Kobata (Resident Minister, Buddhist Churches of San Francisco)、Rev. Julie Hanada (Director of Hospital Chaplaincy and Clinical Pastoral Education, California Pacific Medical Center)、Ms. Naoko Jones (Director of Activities) の説明を受けた。KokoroはILとALによって構成される、日系の高齢者を主な対象とした高齢者住宅である。ケアスタッフが常駐し健康チェックや投薬管理が行われる他、食事や各種催し物などのサービスが提供されている。Kimochiでは、長期の入居ケアに加えて、短期ケア (Respite care) やデイケア・プログラムが提供されている。Buddhist Churches がこれらのCommunityを繋ぐ核となっている点が特筆される

成 果

56

幅広い入居条件の老人施設を見学できただけでな く、多くの創意工夫がある介護や医療を提供している 点も参考になった。特に"規制緩和"により柔軟に介 護や医療の利用が可能な施設が印象的に残った。

出張 報告

福井大学、富山県立大学、金沢工業大学 視察·意見交換

日 時: 平成26年1月28日(火)~30日(木)

訪問者: 古本 泰之 (地域交流推進室長・外国語学部准教授) 石井 博之 (地域交流推進副室長・保健学部准教授)

太田ひろみ (保健学部教授)

井手 拓郎 (外国語学部講師)

依田 千春 (地域交流課課次長)

黒羽 充(地域交流課)

訪問①

福井大学

(教育地域科学部・医学部・工学部)

日 程

平成26年1月28日(火)

対応者

寺岡 英男 氏 (理事 (教育・学生担当)・副学長 (兼) 教職大学院教授)

窪田 昭一 氏(大学改革推進部長(兼)総合戦略部門 経営戦略課長)

青木 直美 氏 (総合戦略部門・経営戦略課課長補佐 (兼) COC推進室室長補佐)

杉本 義則 氏 (総合戦略部門・COC推進室社会連携 係長) 小池 瑞絵氏 (総合戦略部門・COC推進室社会連携 係 (兼) 経営戦略課評価係)

概要

COC事業の取り組みに関するヒヤリングおよび意見交換を行った。まず、文京キャンパスの総合戦略部門COC推進室を訪問し、事業担当者の寺岡先生より全体像の説明を受けた。

福井県をはじめとする6自治体と連携し、5分野で地域の課題解決に取り組んでおり、実施体制として「COC推進機構」を新設、これまでの「産学官連携本部」「地域環境教育センター」「地域貢献推進センター」を強化して地域貢献活動を行い、こうした活動を教育内容へ展開させて「高等教育推進センター」にカリキュラム改革を提案していくというものであった。教育では全学共通・教養教育におけるコア・カリキュラムに地域志向教育を入れ込み、コア教員(本事業の核となる教員)を担当者として配置した。研究では申請時に公募したプログラムを展開し、社会貢献では既往の取



訪問時の様子



ヒヤリングと意見交換

出張報告

り組みを財政的に支援・強化していく流れとなっている。

その後、研究・社会貢献を担当している教員の研究 室を訪問し、取り組みの内容や参加する学生の様子、 地域の方々との交流の状況などの説明を受けた。また、 共同研究の拠点となる施設や学生支援に関わる部署な どを訪問し、教職員や学生から情報収集した。

所 感

理事・副学長を巻き込んでカリキュラム改革や機構

改革全体にCOC事業を埋め込むことで、スムーズに 取り組めていること、COC採択を全学的改革のきっ かけにしている点は参考にしたいところである。また 地域貢献活動に対する教職員評価・権限の強化も積極 的に行っており、併せて職員の職掌範囲の広さや学生 アルバイト(含SA)の積極的な登用が目立っていた。

これまでの取り組みを組織化し、徐々に活動を拡大 していくプロセスを取っていることが安定感のある事 業運営を生み出しているという印象を受けた。

訪問②

富山県立大学

(工学部)

日 程

平成26年1月29日(水)

対応者

松本 三千人 氏 (工学部長・教授)

海下 雅人 氏(事務局教務課・課長)

吉澤 泰樹 氏(事務局教務課・教務学生係長)

森本 佳彦 氏(事務局教務課・情報研究係長)

佐々木 萌 氏(COCコーディネーター)

概要

COC事業の取り組みに関するヒヤリングおよび意見交換を行った。事業担当者の松本先生から事業の全体像を説明していただき、事務局も含めて運用について意見交換や質疑応答がなされた。COC推進本部を学長直属で設置し、教職員・COCコーディネーター・学生(COCTAとして雇用)で構成されており、それを地域協働支援室がサポートする。

学内関係委員会(教務委員会、地域連携センター運

営委員会、キャリアセンター運営委員会など)とは連携・協議を行って調整している。雇用したCOCTA(学部学生がメイン)は、後輩学生の学習サポート、教員との連携による実施プログラム、COC推進本部の活動をサポートしている。研究は既往の取り組みを拡張する形で行っている。

COCコーディネーターは大学内でのニーズを自治体など関係団体に伝え、場の設定を調整する役割を担い、学生の地域活動へ繋げていた。あわせて新設された地域協働支援室など施設を見学させていただいた。

所 感

取り組みの中で、意欲ある学部学生を事業運営自体に関わるTAとして雇用している点はユニークであった。現場と教室をつなぐ仕組みで正課教育を行っており、学生は地域活動へ円滑に参加できると考えられる。この仕組みはとても興味深い取り組みであり、学生の地域志向化を円滑にしていくのではないかと感じた。

本学においても、授業やプロジェクトにおける TA・SA、学内施設における事務サポート学生スタッフの積極的な活用を検討していきたい。

また、教員と学生が地域課題と向き合い、地域の方々とその解決を模索する過程の中で、社会参画力を育成する動きは地域生活障がい者などを対象とする本学の専門職育成にも活かされるといえる。



意見交換と質疑応答



学内施設の見学

訪問③

金沢工業大学

(工学部、情報フロンティア学部、 環境・建築学部、バイオ・化学部)

日 程

平成26年1月30日(木)

対応者

佐藤 恵一氏(全学教務部長・工学部教授)

福田 崇之 氏 (産学連携機構事務局・産学連携推進部・ 連携推進室長)

西川 紀子 氏 (産学連携機構事務局・産学連携推進部・ 連携推進室・運営係長)

概要

COC事業の取り組みに関するヒヤリングおよび意見交換を行った。扇が丘キャンパスを訪問し、事業担当者の佐藤先生から事業の全体像の説明を受け、質疑応答や意見交換がなされた。



ヒヤリングと意見交換

「学力×人間力」に基づき「教育付加価値日本一」を目指すことを前提とし、地域と協働して学生を成長させることを目的としている。地域課題=教育の材料とし、学生・教職員・企業(社会人)・地域住民が参画し、地域の課題解決に取り組むコミュニティ=「コトづくり」プラットフォームを中心的なフレームとして運営されている。アクティブラーニング化が本学教育の基本的な方針で、本事業の中心を「教育」とし、研究や社会貢献活動もこれに繋げている。その後、学生が自由に使用できる自習室やライブラリーセンターなど学内施設を見学させていただいた。

所 感

既存の取り組みを促進することでスムーズな運用がされている印象を持った。教育をすべての中心に置き、それと研究・社会貢献をセットにするやり方は参考となった。

全学統一の学事運営機関の教務部長が事業担当者と して教育を中心とした事業展開をしており、学生は自 然と地域社会と関わりを持ちながら成長していくこと ができる体制が構築されていることを感じた。



学内施設の見学

平成25年度 地(知)の拠点整備事業 関係機関一覧

杏林CCRC拠点推進委員会

■安貝	
職位	氏 名
学 長	跡見 裕
副 学 長	ポール・スノードン
医学部長	後藤 元
保健学部長	大瀧 純一
総合政策学部長	松田和晃
外国語学部長	赤井 孝雄
杏林CCRC研究所長	蒲生 忍
地域交流推進室長	古本 泰之
学園事務局長	加藤 信一
大学事務部長	黒田 雅夫**1
大学事務部長	五十嵐一夫**2
広報・企画調査室長	吹野 俊郎
八王子事務部長	樋田 孝史
八王子事務部副部長	黒田 幸司
八王子事務部地域交流課長	安藤 英視

% 1 ∼ H25. 9

※ 2 H25. 10∼

杏林CCRC研究所

■ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
職位	氏 名
杏林CCRC研究所長	蒲生 忍
特任助教	松井 孝太
特任助教	相見 祐輝
客員研究員	樋口 範雄
客員研究員	松田 智生
事 務 局	多田 時枝

地域交流推進室

■職 員

職位	氏 名
地域交流推進室長	古本 泰之
地域交流推進副室長	石井 博之

地域交流委員会

■委 員

職位	氏 名
地域交流推進室長	古本 泰之
地域交流推進副室長	石井 博之
保健学部 教授	太田ひろみ
総合政策学部 教授	野山 修
大学事務部長	黒田 雅夫**1
大学事務部長	五十嵐一夫**2
広報・企画調査室課長	青柳 貴徳
八王子事務部長	樋田 孝史
八王子事務部教務課長	清水みさ子**3
八王子事務部教務課課次長	小山 俊也**4
八王子事務部教務課課次長	氏江 規雄
八王子事務部教務課課次長	井上 宗一
八王子事務部教務課課長補佐	平本 実
八王子事務部地域交流課長	安藤 英視

% 1 ∼H25. 9

※ 2 H25. 10 ~

※ 3 H26. 3 ∼

※ 4 ∼ H26. 2

60

新聞等による

「地(知)の拠点整備事業」に関する紹介

地域発展につなぐ視点を

羽村市と杏林大連携事業

杏林大生ら 初の羽村バスツアー



多摩川の景観を体感する参加者たち

■平成25年2月14日 西多摩新聞

■平成25年8月21日 東京新聞

(武蔵野版/地域の情報)

国「地(知)の 三鷹の杏林大 選ばれる

紹介記事

■平成25年9月7日 読売新聞(武蔵野版)

総合政策学部や外国語学 総合政策学部や外国語学 おどがある同大八王子キ すンパスは、2016年4 大八王子キ でどの三鷹キャンパスと合 でどの三鷹キャンパスと合 でがある同大八王子キ でがある同大八王子キ 協定書を締結した。 B

三鷹市 大と協定

生涯学習など連携強化

三鷹市と協定

杏林大移転控え 活力ある地域社会創造

学習や街づくりなどの様々会、杏林大学は6日、生涯三鷹市と三鷹市教育委員 な分野で包括的に連携する学習や街づくりなどの様々 対進み、地域に根ざした大学の交流が進み、地域に根ざした大学の交流

■平成25年9月8日 朝日新聞(武蔵野版)

組みを進めていくという。「健康寿命延伸」「災害に 香林大学と三鷹市、市教育委員会は6日、「活力ある地域社会の創造」を目的とする協定を結んだ。杏林大は2016年に八王子市から三鷹市に移転する。協定は、教育や生涯学習、まちづくり、健康・福祉などの分野で、互いに協力するとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカするとの内容。杏林大はカウミを進い、「生きがい創出」

■平成26年3月 大学Times Vol.12(これから注目の大学)

大学了imes

これから注目の大学

2050年を見据えた「都市型高齢社会」における 「生きがい創出」、「健康寿命延伸」、「災害に備えるまちづくり」。 地域社会における大学の未来像

~杏林大学のCCRC(Center for Comprehensive Regional Collaboration) について~

文部科学省が平成25年度から取り組む「地(知)の拠点整備事業(COC)」に、杏林大学が申請した「新しい都市型高齢社会にお ける地域と大学の統合知の拠点」が採択された。2016(平成28)年に井の頭キャンパスが開設される三鷹市、また現存する八王 子市、そして長年協働する羽村市の三市と、市民と大学とが連携して取り組む、教育・研究資源の有効活用について、リーダー シップを発揮する跡見 裕 学長に話をうかがった。

ー「グローバル」と「ローカル」は

地域との交流や、貢献活動は随分以前 からやってきました。中でも杏林ならではと 思われるのは、市内に大学がない羽村市 と包括連携協定を結び、大学の保有する 「知」、「人的資源」、「人材」を有効活用し てもらう活動です。

羽村市ヘインターンシップで学生が行 、、英語教育を外国語学部の学生が行う、 保健学部が羽村市民の健康に取り組む。 医学部が救急診療所に人を派遣するな どの活動を行ってきた中で、今回の「地 (知)の拠点整備事業(COC) | は杏林大 学にピッタリのテーマと判断しました。キャ ンパスが存在する自治体との連携が必要 ですので、医学部と保健学部・看護学科 がある三鷹市 それ以外の保健学部 外 国語学部、総合政策学部の三学部があ る八王子市を巻き込んでの連携・交流とな

杏林は一昨年、文部科学省の「グロー バル人材育成推進事業」に採択されまし て、「グローバル」と今回のテーマである地 方の「ローカル」は「車の両輪」と考え、4学 部の教育・研究資源を動員し、大学と地域 との包括的な連携体制、杏林CCRC ensive Regional Collaboration)を推進させました。

一都市型高齢社会における 「地(知)の循環」

三鷹、八王子、羽村市とも「生きがい創 出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまち づくり」を共通の問題意識としてテーマに 掲げています。特に我々が問題とした大き な切り口は、ある一定程度の人がいて高

齢化になるという都市型高齢社会です。 実際日本の高齢化率は平均で24~25% ですが、三鷹はまだ20%少々、八王子、羽 村市が21~22%と、現時点で日本の高齢 化率よりも下回っています。ところが35年 後の2050年頃、人口が8,500万人になる 時代には全ての市町村の人口が減りま す。今回のプロジェクトも、今後増えるであ ろう高齢者の方たちが、どういう形で大学 と連携して上手く地域の中で循環するか が重要になります。そこが我々の命題であ り、三市を上手く支える胆の部分です。

-2016年 50周年に キャンパスを三鷹市に集約

三鷹市への移転はたまたま重なった形 です。今回のプロジェクトの大きなポイントと して、例えば羽村や八王子で培った地域 との包括連携協定やノウハウを一気に三 鷹に集約し、新しい「地(知)の拠点」を作 り上げ、それを羽村や八王子にフィード バックするというトライアルのチャンスを得 たと思っています。医療・健康・福祉的な医 学部、保健学部と、グローバルな見地で地 域問題、災害対策を考える外国語学部・ 総合政策学部もありますので、それらを総 合すると極めて良質な「地(知)の拠点」と なり、素晴らしい計画や実施案ができると 期待しています。

一市民から吸い上げた問題点やニーズ 杏林大学のCCRC推進の仕掛けのま ず一点目は、「杏林コモンズ |を三市に設 置しまして、関連の教員や学生が地域住 民の方々との交流を通じて健康や観光交 流について考え、ニーズを吸い上げていく 仕掛けです。

二点目は、年に2回ほどの会合を持ち、 地域の方々から得た情報や問題点を、今 度は行政、大学、産業界・経済界から関係 者が集まり、地域活性化案や問題点を出 していくという「杏林CCRCラウンドテープ ル」の設置です。そこで集約された意見を 三鷹に設けた「CCRC研究所」へ持ち込 み、解決策や方策を提案していくという組 織になります。

一地域住民の生の声

昨年11月、「地(知)の拠点整備事業」の シンポジウムを2回開催していずれも100名 以上に集まっていただきましたが、その場で 「杏林が持っているリソースを、どういう形 で地域に出すか。また地域の人達が杏林 とどう関わっていくか」という、「地(知)の循 環 に対する期待の声が届いています。

ー「地域と大学」が必修科目

2014年(平成26年)4月からすべての学 部で「地域と大学」というカリキュラムを必修 科目として取り入れました。地域の抱える 様々な魅力や問題点、いろいろな事柄を学 ぶのですが、それは場所や形を変えてもどこ にでも通用すると考えています。身近な地域 のことをしっかり勉強することによって、応用 範囲や得るものは極めて大きいと思います。

例えば外国人労働者が多い羽村市で 「災害に備えるまちづくり」を考えた場合、 災害時に問題になる弱者問題があがりま す。高齢者や体の不自由な方同様、日本に 住んでいる外国の方々も弱者だと思うので すが、そうした方に対してどう対応するの かということを、4学部が一体となってグロー バルな政策論を展開します。これは極めて 杏林に適したテーマではないでしょうか。

高校生には「グローバル」と「ローカル」 という「車の両輪」のような杏林大学の考 え方とアウトカム(成果)を理解いただきた いです。

一高校生の将来設計を考える

2014年3月 Vol.12

INTERVIEW

その地に生まれ育った人が自分の老後 や、子や孫たちとの共同生活・地域生活を エンジョイできる方策を考えるのが、地域に 根ざした杏林型CCRCです。高校生もそう した自分の将来設計をどう考えるかという ことを勉強するいい機会だと思います。

-未来は開けている

高校生へ伝えたいことは「未来は開け ている」ということです。まだ若い高校生で すからそれを確信して努力して欲しいで す。元来勉強とは楽しいものではないかも しれませんが、学びの過程を通じて自分の 考え方やそれを整理する能力を身につけ られることは見逃せません。勉強しようとい う過程やその思考で養ったものが、自分の 生き方に対して極めて大きな道しるべにな ります。焦らずに生活や学びを通じて多面 的な見方を身につけてください。広い意味 でそれが教養につながるのです。

2016(平成28)年、八王子キャンパスが 移転してくるということで三鷹地域の方々 は非常に期待しています。それはひしひし と感じます。その期待に十分に応えて地域 の方々に杏林の持ついろいろな資源と ウハウを有効に活用していただきたいと思 います。是非一緒に「生きがい創出」「健 康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」を 確立して参りましょう。





http://www.kyorin-u.ac.jp/

【八王子キャンパス】 〒192-8508 東京都八王子市宮下町476 TEL: 042-691-0011(代)

文部科学省 「地(知)の拠点整備事業」平成25年度採択 新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点

平成25年度 成果報告書

発 行 日 平成26年8月

編集発行 杏林大学 地域交流推進室

〒192-8508 東京都八王子市宮下町476 TEL: 042-691-8725 FAX: 042-691-3809 http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/

印 刷 (株)ナナオ企画 〒104-0033 東京都中央区新川2-9-9

